

自然と共生する人間 多様な自然観と災害文化



岩手大学地域防災研究センター 第7回地域防災フォーラム

2014年 1月30日(木) 14:45～18:10

岩手大学工学部キャンパス内 復興祈念銀河ホール

講演録

岩手大学
地域防災研究センター



自然と共生する人間 多様な自然観と災害文化



岩手大学地域防災研究センター
第7回地域防災フォーラム

講演録



開会挨拶及び趣旨説明	3
 第 1 部 被災地の調査・実践から	11
「防災の町田老」の風景としての防潮堤と震災復興	
大棒 秀一（NPO 法人立ち上がるぞ！宮古市田老理事長）	13
 「海」から見た神社の立地と防災	
山崎 憲治（元岩手大学教授）	27
 「森は海の恋人」と震災復興	
畠山 信（NPO 法人 Peace Nature lab 副理事長）	42
 第 2 部 講 演 会	57
自然認識の多様性を考える	
～サンゴ礁地域からアフリカまで	
堀 信行（奈良大学教授 文化庁文化審議会専門委員）	59
 第 3 部 討 論 会	87
パネル・ディスカッション	
災害と自然認識	
～復興を支える自然観の再構築を求めて	89
 閉会挨拶	98



会場 岩手大学復興祈念銀河ホール | 盛岡市上田
岩手大学工学部内

時間 14:45 ~ 18:10

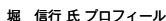
フォーラムプログラム

入場料 無料【事前申込不要】

<第3部 討論> 17:35-18:10

- ## 信行 氏 プロフィール

堀 信 行 (奈良大学教授、文化庁文化審議会専門委員)



理学博士。専門は環境地理学。奈良大学教授・同大図書館長、東京都立大学名誉教授。日本地理学会、地理教育学会、日本ナイル・エチオピア学会、日本サゴ礁学会などで代議員、評議員を歴任し、現在、日シエリカレッジ振興会会長、文化庁文化審議会専門委員。世界的なサゴ礁研究者として知られるほか、アフリカの熱帯地域の環境変遷、人間と自然の関係論や風土論、異郷論などを論じている。

開会挨拶及び 趣旨説明

【進行・山崎友子教授】

皆さま、こんにちは。定刻になりましたので、これから、第7回防災フォーラムを始めさせていただきます。私は、本日の進行を担当致します地域防災研究センター兼務教員の山崎と申します。どうぞ宜しくお願い致します。



最初に、連絡事項を先に申し上げます。フォーラム中、地震が発生した場合等何かありましたら、係のものが誘導致します。後ろが出入り口になっていますが、誘導いたしますので、どうぞ揺れが収まるまで着席してお待ちください。

次に、お配りした資料に質問用紙とアンケートがあります。質問用紙は3枚お手元にありますでしょうか。第1部の3名のご発表に対して、ご質問等ありましたらどうぞお書きください。休憩時間に回収させていただきます、第3部のパネル・ディスカッションにおいて、テーマに関連したご質問を中心に発表者に回答をお願いしたいと思っております。ご質問、お気付きの点をご記入ください。それから、アンケートは、今後のフォーラム企画の際の参考とするためのものです。ご意見をお書き頂きまして、最後に受付のところに回収箱を準備しておりますのでそこにお入れくださいますようお願い致します。

それでは、これより、第7回地域防災フォーラム「自然と共生する人間～多様な自然観と災害文化」を始めます。最初に、地域防災研究センター、センター長の堺よりご挨拶を申し上げます。

● 開会挨拶 ●



【堺茂樹センター長】

ただいまご紹介をいただきました堺でございます。本日のフォーラム、平日のしかもこの時間でたくさん来ていただけるかと心配していたのですが、これだけの多くの方に来て頂きまして、本当にありがとうございます。

今日は、特に自然という観点での防災、あるいは復興という関係のお話をたくさん聞かせていただくわけです。第1部では、田老の大棒さまから、かつて津波防災の象徴であった田老の防潮堤ということをキーワードに。それから、山崎先生からは、神社の立地という観点。そして、畠山さんは、これもすでにすっかり定着しましたが、「森は海の恋人」という考え方あるいは活動、これと震災復興、今後の防災という関わりについて、実践を通したお考え等を聞かせていただきます。本当に、どうもありがとうございます。

第2部では、奈良大学の堀先生に、これも普段あまり考えたことがないですけれども、自然をどう認識するかということが、たぶんキーワードになるのだと思います。自然は、なんとなく自然なので、なんとなく感じているだけなのですが、そこをどうやって自分の考えというものができてきているのか。あるいは、自然災害にもつながると思いますので、そういった意味で、普段、あまり考えたことのないお話が聞けるのかなということで、大変有意義な講演になると思います。大棒さま、畠山さま、それから、元同僚の山崎先生。それから、一番遠くからおいでいただいた堀先生は、本当にお忙しいところをおいで頂きまして、本当にありがとうございます。

私も、防災に携わっていろいろな活動していて、楽しいこと、うれしいことは、あまりないのですが、最近、少しだけうれしいのは、この地域防災研究センターが発足しましてから約2年経ちます。それ以前は、工学部付

属の地域防災研究センターでしたので、どちらかというと、ハード系の活動等が多かったです。もちろん、防災教育等も行っておりましたけれども、私がそもそも土木屋なので、なんとなくハード系の話をしてきたのです。約2年前に震災を受けて発足した、大学全体の研究センター。岩手大学は文系が2学部、理系が2学部の4学部ありますけれども、この4学部全体の教員が参加する防災センターに発展しました。そのおかげで、今日も、山崎先生が色々アレンジしていただいているのですけれども、かつては、我々が考えたことがないようなこのようなフォーラム。文系サイドといいましょうか。心の問題を大事にするようなテーマで、いろいろ企画することができた。そういう意味で、幅が広がりつつあると思います。それは、このセンターを立ち上げて、本当によかったなと感じる瞬間でございます。これからも、皆さまのいろいろなご協力を頂きながら進めていこうと思っておりますので、ぜひ、これからも、ご協力あるいはご支援を頂きたいと思えます。

最後に、よく MVP などがインタビューを受けるときのバックシートを作りました。これは、地域防災研究センターとして世の中にこれだけは発信したいというようなことを記者発表等でやろうとするときに、これをバックに、我々のメンバーが説明する為です。つまり、このバックが出てきたら、「何かいいこと言うぞ」と思って頂ければと思います。良いことという意味は、防災に役立つこと復興に役立つことで、我々が何か一つ得たもの。あるいは、皆さんに知って欲しい事というものが纏まった段階で、少しずつ発信しようと思っています。ですから、このバックシートが出てきたら、チャンネルを回さずに、見て頂ければと思います。

今、二十数名がこの防災センターで教育・研究・地域での活動を行っておりますけれども、まだまだ大きい組織とは言えません。ただ、いままさに文理融合のセンターとして育ちつつありますので、そういった意味でも皆さまから忌憚のないご意見を頂き、それに応えるような発展をしたいと思っております。今日はじっくり聞いて頂いて、先ほどありましたアンケート等でコメントを頂ければ、我々にも大変勉強になりますので、どうぞ宜しくお願い致します。簡単ではございますけれども、開会の挨拶とさせていただきます。どうも、ありがとうございます。

【山崎友子教授】 それでは、本日のフォーラムの開催の趣旨を手短に申し上げたいと思います。先ほど、センター長からも災害文化という聞き慣れない言葉が出てきましたというお話がありましたが、災害文化というものをどのように考えているか。あるいは、災害の研究・復興という問題のなかで、災害文化をどのように位置付けているのかということを、まずお話ししたいと思います。

災害をトータルにとらえる

山崎善也（2012）

災害文化

伝統と民俗

生活・生活

安心・安全

教育・学習

防災・防災

復興・復興

被害

救済

被災

①

すから、その地域が、過去それまでにどのように課題と立ち向かってきたのかが、その衝撃によって明らかになってきます。例えば、東日本大震災では、被害者の多くの方が高齢の方でいらっしゃいました。それは、被災地の高齢化という問題を映し出しているわけですが、同時に日本社会が持っている課題でもあります。あるいは、多くの水産業が被害を受けました。日本の第一次産業というものがどのような岐路に立っているのか、そういう課題も私たちに与えてくれています。さらに、福島の問題にあるエネルギーの問題。そういう日本社会が抱えている問題、地域が抱えている問題・課題、それを通して、社会全体の課題を考えるという宿題を我々に与える、そういうきっかけになっているわけです。

6 the 7th regional disaster management forum

けですが、そこに至るときには、予報・警報というものがどのようになされたのかという過去に遡った検証も必要になります。

救援の次のステージとしては、復旧・復興というステージに進みます。ここでは、その地域が持っている課題に対応して、どのような復旧・復興がなされるべきかということが考えられていく。そうでなければ、その地域の再生ということには繋がっていかないと思います。そこで、どのような復旧・復興があるかという点については、一つは教育からのアプローチ。これにより、地域を知ること、今までどのようなことをやってきたのかという検証とともに、私たちが持っている自然観や、これまでの伝承、地域史、それから生活・生産のなかにも防災ということを配慮したさまざまな技術があることに気付いていったりします。このようなことが検証され、復旧・復興のなかで、さらにもっと新しいものが生まれていくということもあると思います。過去の良いものを継承し、更に良いものを創っていくということがありますが、これは、災害を通してで初めて気付くという事でもあると思うのです。今まで何気なくそのように暮らしていたけれども、「ああ、自分たちの住む地域はこういうところであった。先祖は、こんなことを残してくれていた」と気づくことがあります。石碑であるとか、そういうものを読み返してみると、その地域の持っている課題とともにどのように闘ってきたのか、それをどのようにして私たちに記憶にとどめさせようとしてくれているのか、様々な事を学ぶことができます。そこに気付いていったときに、災害文化として、私たちが共有するものになっていき、次のより災害に強い社会づくりの基になっていくのではないかと思います。

災害文化をこのように位置づけて考えてみました。その文化を共有し伝達をしていくことによって、より災害に強い地域社会ができるわけですが、それぞれの地域が持つ課題というのがありますから、非常に多様なアプローチというものが、それぞれの段階で必要になっていくのだと思います。それぞれの段階でのアプローチをさらに深めていくということによって、安心・安全なコミュニティがつくられていくということになります。そこには、必ず生産というものがなければ人はそこに住まないわけで、生産活動そして生活と両方が両立して、安心・安全なコミュニティというものがそこに存在でき

るということになると思います。

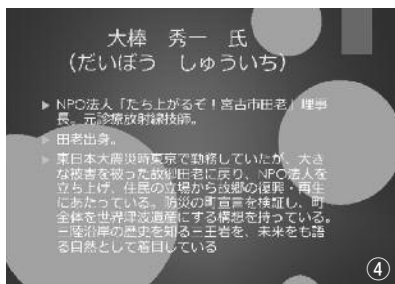
このサイクルができあがれば減災が実現できます。うまくいかなかった場合は災害が深刻化していくという事態になりますから、このように災害をトータルにとらえる必要があります。この全体像というものを私たちは把握しながら、それぞれのステージで必要なこと、検証、新たな知見を得るということが必要になってくるのだと考えております。

先ほどお話ししましたように「未来を築け、被災地に学ぶ被災地の子ども達とともに」というタイトルで、第6回フォーラムを開催しました。災害文化の中で、教育、学習、そこに焦点をあてていったわけですが、今回は自然

観というところに焦点を当ててフォーラムを考えました。

先ほどセンター長からご紹介がありましたように、第1部では、三陸沿岸の被災地で実践を通して自然と立ち向かう、あるいは、自然と共生をしてもらえるそういうお三方においていただき

きました（図②）。お三方からは、三陸沿岸の自然についての調査・実践を基にした発表があります。それぞれ30分です。恐れ入りますが、質問の時間は設けておりません。何かお気づきになった点、聞いてみたい、あるいは強い関心を持たれた点は、質問用紙のほうにお書きください。それを、後のパネル・ディスカッションの中で使わせていただきたいと思います（図③～⑧）。



「海」から見た神社の立地と防災

山崎 憲治 氏 (元岩手大学教授)



⑤

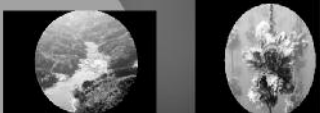
山崎 憲治 氏
(やまざき けんじ)

- ▶ 博士(地理学)。専門は水圏。元岩手大学地理学。現在、岩手大学・地理学・非常災害学。
- ▶ 著書1冊あり。
- ▶ 岩手大学地理学専攻科員に「東洋の海国が防災を考える」を2003年に立ち上げ、震災前から津波防災研究を推進している。
- ▶ 著書の論文・発表
 - 『花水書』『人文地理学専攻』、丸岡出版、2013。
 - 『地誌と神話』日本地理学会(地誌学人集)における発表及びアブストラクティング、2016。
 - 『東北日本文化と観光地の風景—地域の個性を生かした地景に肉付けして』、『観光研究』vol.21 No.1, pp.41-50, 2017。
 - 『防災可能な社会をつくる東洋学—岩手大学が95の発端』山崎 憲治・中村武雄編著。岩手日報社、2010。

⑥

「森は海の恋人」と震災復興

畠山 信 氏
(NPO法人「森は海の恋人」副理事長。
NPO法人Peace Nature Lab 副理事長)



⑦

畠山 信 氏
(はたけやま まこと)

- ▶ NPO法人「森は海の恋人」副理事長。千葉県習志野。
- ▶ 津波被災地復興推進委員会主任。
- ▶ 被災地の復興を全う後、心も「こころ」の復興を始める。被災地復興を推進。震災復興委員会を立ち上げ、被災地復興を推進。被災地復興委員会を立ち上げ、被災地復興を推進。被災地復興委員会を立ち上げ、被災地復興を推進。
- ▶ 被災地復興委員会を立ち上げ、被災地復興を推進。被災地復興委員会を立ち上げ、被災地復興を推進。被災地復興委員会を立ち上げ、被災地復興を推進。被災地復興委員会を立ち上げ、被災地復興を推進。

⑧

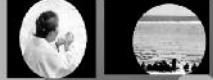
第2部は、奈良大学の堀先生に来ていただきました(図⑨～⑩)。堀先生は、サング礁研究で有名な先生でいらっしゃいます。そして、アフリカ研究でも有名でいらっしゃいます。三陸とは違う場所、空間をもつアフリカは、まったく違う空間認識があると思います。サング礁もそうです。サング礁では、沖縄のお話が出てくるとと思いますが、違った地域の空間認識から、三陸の調査・実践というものに対して、俯瞰的な視座を与えていただけるのではないかと思います。

第3部では、登壇者の皆さんを中心にディスカッションを行います。どうぞ会場の皆さまも、紙での問いかけという形ではありますけれども、ご意見

第2部 講演

「自然認識の多様性を考える
～さんご礁地域からアフリカまで」

堀 信行 氏
奈良大学教授・文化庁文化審議会専門委員

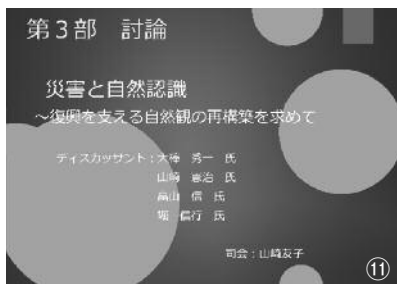


⑨

堀 信行 氏
(ほり のぶゆき)

- ▶ 博士(地理学)。専門は自然認識。
- ▶ 奈良大学地理学。元奈良大学地理学。現在、奈良大学・地理学・非常災害学。
- ▶ 著書1冊あり。
- ▶ 岩手大学地理学専攻科員に「東洋の海国が防災を考える」を2003年に立ち上げ、震災前から津波防災研究を推進している。
- ▶ 著書の論文・発表
 - 『花水書』『人文地理学専攻』、丸岡出版、2013。
 - 『地誌と神話』日本地理学会(地誌学人集)における発表及びアブストラクティング、2016。
 - 『東北日本文化と観光地の風景—地域の個性を生かした地景に肉付けして』、『観光研究』vol.21 No.1, pp.41-50, 2017。
 - 『防災可能な社会をつくる東洋学—岩手大学が95の発端』山崎 憲治・中村武雄編著。岩手日報社、2010。

⑩



等たくさんお寄せいただいて、意見交換が深まるようにと願っております（図⑪）。以上が、開催の趣旨です。これで終わります。

**第1部
被災地の
調査・実践から**

「防災の町田老」の風景としての防潮堤と震災復興

大棒 秀一（NPO 法人立ち上がるぞ！宮古市田老理事長）

【山崎友子教授】 それでは、第1部の「被災地の調査・実践から」の部に入りたいと思います。最初の発表を、「防災の町田老の風景としての防潮堤」ということで、大棒秀一さまにお願いしました。大棒さまは、田老のご出身ではありますが、東京で放射線技師として働いておられたところ東日本大震災が起これ、ふるさとに戻ってふるさとの復興のために「NPO 法人立ち上がるぞ！宮古市田老」を立ち上げられ、理事長として活動なさっているところです。今回は、住民の立場から防災の町宣言というものを検証し、町全体を世界津波遺産にしようという構想についてお話し頂けるものと思います。また、三陸沿岸の歴史を知っている三王岩はご存じでしょうか？底のところは古い地層で、恐竜時代の地層だそうです。そのような三陸沿岸の歴史を知る三王岩を、これからの未来を語るものとして着目されたジオパーク構想についてもお話し頂けるものと思います。では、大棒さま、宜しくお願い致します。



【大棒秀一理事長】 ただいま過分な紹介を頂きました「NPO 法人立ち上がるぞ！宮古市田老」の大棒と申します。本日は、こういう機会を与えていただきまして、どうもありがとうございます。それでは、「津波防災の町田老の風景としての防潮堤と震災復興について」申し上げます

（図①）。

これ（図②）は震災前の田老の町並みです。これが津波によって、一瞬にして、こういう（図③）状況になりました。田老は、昭和8年の津波後に建てられた堤防、チリ地震津波の後に堤防がもう一つ建てられました。いわゆるこちらが二線堤、一線堤とされています。津波によって一線堤の海側堤

防が壊れています。そして、湾全部が壊れていまして、こんな状況になりました。津波は恐ろしいです。田老の被害状況です（図④）。明治三陸大津波、



被害状況			
	明治三陸大津波	昭和三陸大津波	東日本大震災津波
マグニチュード	7.6	8.3	9.0
最大波高	15m	10m	8.5m以上
罹災戸数	336戸	505戸	1,691戸 ※1
死者・行方不明者	1,859人	911人	181人
一家全滅	130戸	66戸	-
罹災生存者	36人	1,828人	-
漁船流失	540隻	909隻	840隻

※1 平成24年11月6日現在

昭和三陸大津波、東日本大震災（津波）の比較です。一番着目して頂きたいのは、犠牲者が181人という結果になっている点です。明治・昭和に比べると、だいぶ少なくなっているとはいいまでも、この181人をどうとらえるかということです。田老は「津波太郎（田老）」と揶揄され、津波によって壊滅的な被害を繰り返し、復興してきた歴史があります（図⑤）。防潮堤の築造に加え、「津波防災の町」宣言に象徴されるように、統合的な防災対策を推進してきた地区でありました。平成大津波では、宮古市の被災33地区のうち、最大の181名の犠牲者を出す結果となりました。「津波防災の町」を宣言していながらも、181人という宮古地区では一番の犠牲者を出しました、「なぜ」と思います。よく言われているのが、このように立派な堤防があったという安心感があった

why?

- ・ 田老町は津波太郎（田老）とも呼ばれ、津波によって壊滅的な被害を繰り返し復興してきた歴史がある。防潮堤の築造に加え、「津波防災の町」宣言に象徴されるように総合的な防災対策を推進してきた地区であったが。
- ・ 平成大津波被災33地区（宮古市）の中で最大の181名の犠牲者を出す結果となった

から、多くの人が逃げ遅れたという証言がなされています（図⑥）。マスコミ報道でも、防潮堤の存在はむしろ津波被害を拡大する原因になっている。防潮堤を信頼して避難しなかった人も犠牲になったのも事実である。防潮堤があったから油断してしまい避難が遅れて被災してしまったということが言われていますが、的確な情報が伝えられていたならと思うのは私だけではないと思っています（図⑦）。田老には、「津波防災の町宣言」という碑があります（図⑧）。碑には「田老町は明治29年、昭和8年など幾多の大津波により壊滅的な被害を受け、多くの尊い生命と財産を失ってきました。しかし、ここに住む先人の不屈の精神と大きな郷土愛でそれを乗り越え、今日の礎となる奇跡に近い復興を成し遂げました。生まれ変わった田老は、昭和19年津波復興記念として、村から町

立派な堤防があるという安心感から、多くの人が逃げ遅れた」という証言もある

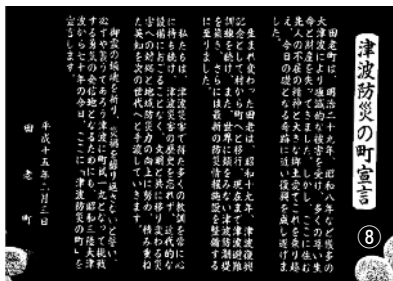


的確な情報が伝えられていたら

マスコミの報道

- ・防潮堤の存在は、むしろ津波被害を拡大する原因になっているのである。
- ↓
- ・防潮堤を信頼して避難しなかった人々が犠牲になったことも事実である
- ・「防潮堤があったから油断してしまい避難が遅れて、被災してしまった」

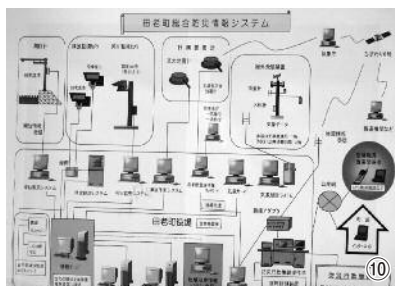
⑦



へと移行し、現在まで津波避難訓練を続け、また、世界に類の見ない津波防潮堤を築き、さらには最新の防災情報施設を整備することになりました。私たちは、津波災害で得た多くの教訓を常に心に持ち続け、津波災害の歴史を忘れず、近代劇な設備におごることなく、文明とともに移り変わる災害への対処で地域防災力の向上に努め、積み重ねた英知を次の世代へと手渡していきます。御霊の鎮魂を祈り、災禍を繰り返さないと誓い、必ずや襲うであろう津波に町民一丸となって挑戦する勇気の発信地となるためにも、昭和三陸大津波から70年のここに、「津波防災の町」宣言をします。平成15年3月3日 田老町、昭和の津波が来た日に、「津波防災の町」宣言を行いました



た。今回の津波でどういう体験をしたか、振り返ってみたいと思います。平成 15 年に宣言してから 10 年たつのですけれども、10 年たった後どうだったのか、いまは宮古市と合併して、「津波防災都市宣言のまち」という看板が、昔の田老の役場の前に、堂々と立っています (図⑨)。田老の「総合災害情報システム」、このような立派なシステムがありました (図⑩)。これを基に津波防災の町宣言をしたのですけれども、津波観測システム、ここに津波観測監視カメラ



があり、録画ができるようになっていきます (図⑪)。あとは潮位計が海岸にあり、東大地震研につながっている情報サーバーがあり、全ての機材を無停電電源装置に接続してあります。こんな立派なシステムがありましたが、このシステムが今度の平成の大津波でどのように機能したのかということは、今まで触れられてこなかったかと思います。これが総合事務所にあります防災機器管理室の現状の姿です。監視モニター、潮位測定モニター、津波予測システム、こういう立派な近代的な設備が整っています (図⑫)。総合事務





所の真上には、津波観測テレビカメラもありまして、これが実際に写っているところです（図13）。これ（図14）が、テレビモニターのライブ映像で、ここが堤防、これが海です。こういう波の状況も分かります。当然、今回の津波もモニターから見えているはずなのです、見えたのです。これ（図15）が防災無線です。これでしっかり情報をライブで発信できていればと考えているわけです。南三陸町では、防災担当の女性職員は最後まで防災庁舎の無線機の前から離れず、「6メートルの津波が予想されます、急いで高台に避難して下さい」と連呼したとあります。これがもし田老で行われていたならば、181人という犠牲者はなかったのではないのでしょうか。堤防があるか



ら逃げなかったんだと言われるのは、地元田老人としては心外だと思っています。防災意識は高い地域だと自負しておりますけれども、こんな状況です。これ（図16）が防災無線スピーカーです。「津波防災の町」を宣言したまちは、近代的な設備はどのように機能したのか、地形や堤防・水門の配置が津波の動きにどのような影響を与えたのかということを検証するべきではないかと考えています（図17）。これ（図18）が田老の地形になります。これが第一堤防と言われる海側の堤防で、これが昭和9年から建築された山

「津波防災の町」を宣言した町の検証

- ・近代的設備はどのように機能したのか
- ・地形や堤防、水門の配置が津波の動きにどのような影響を与えたか

17

側の堤防です。これがXの字で交差しています。ここに田代川水門（図⑱）があります。ここで、津波がどのような流れをしたのかということも大事な



のですが、この水門は壊れていません。これ（図⑳）は田代川水門の前にある鉄柱ですけれども、本来なら水門に向かって曲がるはずではないかと思うのですが、逆に、反対方向に曲がっています。これはこちらに力が加わった反射波の影響かと考えられます。これ（図㉑）は自衛隊の航空写真です。この様に、こちらに田代川水門が流れて、この辺が先に津波が堤防を乗り越えています。こちらの方は、まだ津波が来ていない状況です。

東日本大震災の津波検証は、「津波防災の町」宣言をした田老の責務だろうと考えています（図㉒）。そこで検証した結果のなかから多くの教訓を世界に向けて発信し、必ずやまた襲ってくる津波に対し、共生する社会と津波被害を減災する英知を次の世代に伝えていく義務があるだろう。それが「津波防災の町」宣言をした田老の責任だ

東日本大震災の津波検証は
「津波防災の町」宣言をした



田老の責務



津波検証で得た多くの教訓を世界に向けて発信し必ずや襲うであろう津波と共生する社会と、津波被害を減災する英知を次の世代へと伝えて行く義務。

㉒

ろうと考えます（図23）。もしそれをしないのなら、今はまだこのようなものがありますけれども、これは取り外さないといけません。これを掲げている以上、やはり検証をしっかりと世界に検証結果を伝えていくのが津波防災宣言をしたまちの責任と考えます。宣言文の中にもあったのですが、世界に類を見ない津波防波堤・防潮堤ということが書かれてあります。世界に類を見ない防潮堤が、今回の津波で越えられました。一線堤は壊れました（図24）。これが一線堤と言われている海側の堤防が壊れた状況です。一線堤は



うな作りで良かったのかもしれませんが。これで波が防げると思っているのだと思うのです。これを受けて、今後どうしていくかというのが、やはり今後の津波対策につながってくると考えます。これ（図25～26）が壊れた堤防です。これが残っています。まだこう





いう状況で残っています。このスライドは(図㉑)宮古の市役所から津波が防波堤を超える瞬間の写真です。これはよく皆さん、テレビ等で見ています。宮古の防波堤は壊れなかった。こんなに薄っぺらなのですが全然壊れていないのです(図㉒～㉑)、何

故か。田老の第一線堤は、壊れています、破壊されています。こういう状況です(図㉒)。

これ(図㉓)は田老の復興計画の絵です。ここに国道45号線があつて、二線堤がここ、Xの交点がここ。二線堤の前に、海側に14.7メートルの堤防を作る事になりました。直角な箇所があつたりで、第二線堤のように滑らかではないのでどうなのかと思うのですが、こういう復興計画が考えられ進められています。これ(図㉔)は昭和8年、津波前の田老の街並みです。このような街並みであったそうです。昭和三陸大津波に遭ってから田老の復興計画は、関東大震災後、帝都復興院で岩手県水沢出身の後藤新平が検



討された災害に強いまちづくりが反映されたものとされ、堤防と市街地計画を一体とした復興計画でありました(図③③)。各家から2割の土地を無償で提供してもらい、道路の幅を広げて避難しやすく、火災の延焼を食い止め等の防災を優先したまちづくりが考えられた。防潮堤は津波を真っ直ぐに受けるのではなく威力を受け流すよう、力を分散するような計画となっていたということです。これ(図③④)が作られた街並みです。これが国道45号線で、これが一線堤、いわゆる堤防です。このまちは碁盤の目の様に出来上がっておりまして、この道路は真っ直ぐ山の避難路に通じ、停電でも夜でもまっすぐ逃げる事が可能な防災を重視した町でした。実際、震災後にまちの航空写真を見えますと、このようにきれいに残っています(図③⑤)。このように真っ直ぐな街並みは、津波避難するためには非常に都合の良い作りになっていると思います。このスライド(図③⑥)は、いま考えられているまちづくり案でありまして、こういう昔の町並みを全部つぶしてと言いますか、無くして、野球場だったり市街地になったりと、そういうまちづくりを計画しております。これでは、昭和8年の津波を経験して避難しやすい碁盤の目の町、四つ角の隅切り、広い道幅の道路、まっすぐ見通しのいい道など作り

昭和三陸大津波の復興計画は関東大震災に検討された災害(津波)に強い街づくりを反映

- ・堤防と市街地計画を一体とした復興計画
- ・各戸から2割の土地を無償で提供してもらい道路拡幅に当てた
- ・防潮堤は津波を直に受け止めるのではなく、勢力を受け流すように計画

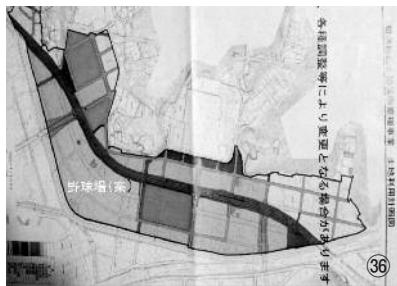
③③

碁盤の目の街並み

③④



③⑤



③⑥

津波文化の消滅

- ・避難しやすい
- ・ 碁盤の目の街並み
- ・ 四つ角の隅切り
- ・ 広い道幅
- ・ まっすぐ見通しの良い道

③⑦



たろう観光ホテル津波遺構



防災を実践してきた街並みが、津波文化が消滅するのではないかと心配しております（図③⑦）。これ（図③⑧）が、たろう観光ホテルです。政府が津波遺構として保存整備費約 21,000 万を国費投入した第 1 号の建物です。震災直後はこんな感じで瓦礫がここへ来たのです、たくさんありました（図③⑨）。今はこのように綺麗になっています（図④⑩）。たろう観光ホテルの社長さんがホテルの 6 階から撮ったビデオがあるのですが、そのビデオを見せながら実際の津波の恐ろしさを伝えていこうということで遺していくことになったのです。周りにはたくさん加工場とか建つ予定になっています。その中でここ（震災遺構）がぼつんと 1 個あって、本当に津波の恐ろしさを伝えてい



破壊された防潮堤の水門

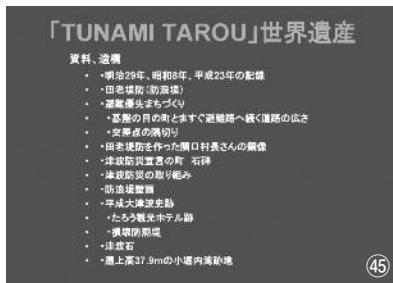


けるのかと思います。遺すならば、本当に伝えるならば、やはりこのような壊れた堤防や樋門を一緒に遺した方がよいと思います（図④①～④②）。これ（図④③）は記念碑です。小学校の裏にあります。私は田老津波遺構を丸ごと世界遺産ということにしていってらうかと思っています（図④④）。田老市街一体を津波世界遺産として貞観大津波、慶長大津波、明治三陸大津波、昭和三陸大津波、平成三陸大津波などから田老が壊滅的な被害を被りながらも津波からの復興に努力を積み重ねてきたこと、津波防災・減災に取り組んで養った英知、まちづくりや防浪堤整備などを世界の方々にきちんと伝えて実感して学ぶ場とする。さらに大津波鎮魂碑を建設して追悼の場とするとともに、災害の記憶を後世に伝える被災の場としての役割を担い、世界の津波防災・減災教育につなげていく。その場所はこれまでの取り組みを通してても田



津波遺構「田老」まるごと世界遺産へ

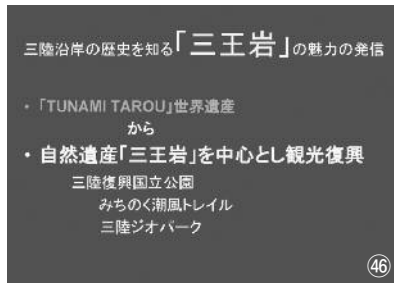
田老市街地一帯を津波世界遺産として、貞観大津波、慶長大津波、明治三陸大津波、昭和三陸大津波、平成三陸大津波などから田老が壊滅的な被害を被りながらも、津波からの復興の努力を積み重ねてきたこと、津波防災・減災に取り組んで養った英知、まちづくりや防浪堤整備など、世界の方々に真実を伝え、実感していただく学ぶ場とする。さらに「大津波鎮魂碑」を建設して、追悼の場とすると共に災害の記憶を後世に伝える被災の場としての役割を担い、世界の津波防災・減災教育に繋げていく。その場所はこれまでの取り組みを通してても田老が適地である。



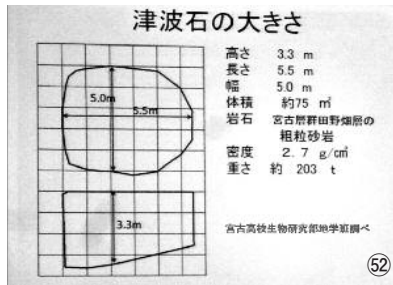
老が適地ではないかと考えており、「TSUNAMI_TAROU」世界遺産へと活動に取り組みたいと最近思っています（図④⑤）。こういうお話を公にするのは、今日ここが初めてでして、これから活動を進めていきたいと思っています。田老にはこれだけの資料や遺構があります。これを整備しながら、津波世界遺産につなげていけたらいいかと思っています。

同時に、田老には三陸沿岸の歴史を知る三王岩（図④⑥）があります。世界に誇れる岩と思っています。自然遺産、三王岩を中心とした観光機構を目指していきたいと考えています。三王岩は、三陸復興国立公園にある数多い奇

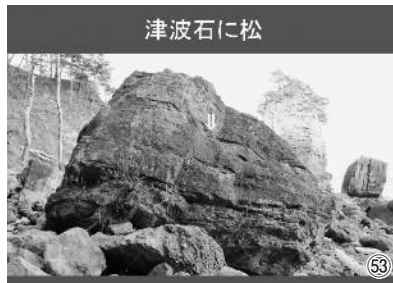
岩景観の中にあつて最も圧巻で、高さ 50 メートルの通称男岩の両側には女岩・太鼓岩が寄りそって、寄せ返す波と、当たる風が形作った美しい自然の美術品です（図④⑦）。砂岩と礫岩が水平なしま模様の岩肌には、はるか昔白亜紀の記憶が封印されているかのようです。これ（図④⑧）は、ダイヤモンド三王です。今回の津波で、三王岩のところに津波石が確認されています（図④⑨）。三王岩と同様、前期白亜紀の約 1 億 1,000 万年前の海に蓄積してきた砂岩や礫岩でできているということです。これは夜、花火の明りで撮影された三王岩です（図⑤⑩）。これがこの場所からここまで約 30 メートル移動したとされています（図⑤⑪）。この津波石の大きさは、宮古高等学校生物

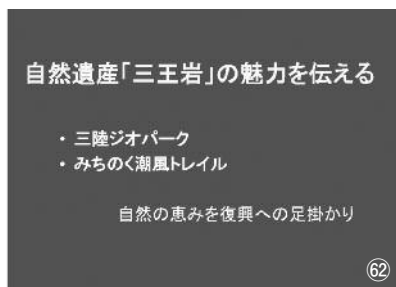
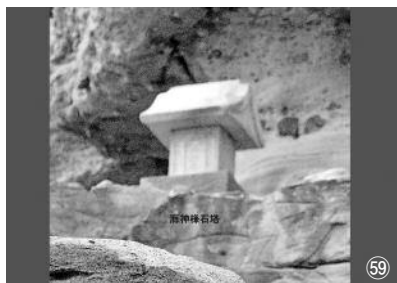


研究部地学班が調べたところ、だいたい2トンの重さがあるそうです(図⑤②)。津波石には、津波後に根付いたと思うのですが小さい松が生えていま



す(図⑤③～⑤④)。復興のシンボルとして成長を見守っていきたいと思います。夏になりますと、はま菊も津波石の上に咲きます(図⑤⑤)。花言葉が、「逆境に立ち向かう」という花言葉があるそうです。これが三王岩で、海食洞があります(図⑤⑥～⑤⑦)。海食洞は、





うに（図60）壊れていて、今も通行止めとなっています。これ（図61）は磯の口あけの様子ですが、人工物は壊れてしまいましたが、浜の自然は再生して海の恵みで漁師を支えています。自然遺産「三王岩」の魅力を伝えるため

に、三陸ジオパーク、みちのく潮風トレイルを通して自然の恵みを伝えてきたいと考えております（図⑥2）。これ（図⑥3）が三陸ジオパーク田老地区のサイトです。朝日が昇ってきて田老地区も復興は明るい兆しが見えています（図⑥4）。これで私の講演を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【山崎友子教授】 大棒さまありがとうございました。検証が必要だという、非常に重要な点をご指摘頂きながら、たくさんの資料を示していただきました。皆さまご質問、どうぞ用紙にお書きください。あとで回収させていただきますと思います。

次の発表ですが、「『海』から見た神社の立地と防災」ということで、一昨年まで岩手大学教授、現在岩手大学非常勤講師をしております山崎憲治氏より発表があります。山崎憲治氏は、専門は水害で、岩手大学に着任後、「津波の実際から防災を考える」という科目を立ち上げ、震災前から津波防災研究を進めておりました。それでは発表のほうお願い致します。

「海」から見た神社の立地と防災

山崎 憲治（元岩手大学教授）



【山崎憲治元教授】 皆さんこんにちは（図①）。今日は神社の話を少しさせて頂くと同時に、全体の構造のなかに自然観というのをどのように位置付けるかというところまでお話を進めたいと思います（図②）。神社といっても、三陸沿岸にある神社と仙台平野の神社ではだいぶ違っ

ております。津波に対して、三陸沿岸の神社は頑張ったのですが、仙台平野のほうは根こそぎやられていることが見られます。ですからそれぞれの神社

「海」から見た神社の立地と防災

漁村域と農村域の神社立地の差異
からみる地域の海に関わる自然観
山崎 憲治

①

話題提供の目的と方法

- 三陸リアス沿岸では神社の津波被災は少ない。一方、仙台平野では神社が被災を免れたとは言えない。岩手県と宮城県的神社被災を現地調査・聴き取りと地形図から明らかにし、両者の違いを示し、違いがどこに起因するかを考察した。
- 岩手県三陸沿岸の漁村集落と仙台平野の農村部の神社の被災状況を具体的に示す。
- 漁村集落の中で神社の位置と役割を考える。海とのかかわりで神社の立地を8つのパターンで分類。
- 漁村の神社の立地は、地域住民の海に対する意識、あるいは自然観・津波災害を反映しているものが多い。神社を避難施設として積極的に位置づけることも必要である。

②

から、その地域の人々は神社をどのように捉えているか、あるいはどういうところに立地するのかというところで、ずいぶん違った結果が出てくるように思えます。特に漁村の神社の存在を考えてみましょう。もしそれが津波に対して安全であったとすれば、神社に上ればなんとかなるということもあるわけです。神社にはだいたい階段がありますから、階段は足の不自由な方には無理です。そういう所にいわば安全なスロープがかけられれば、かなり避難の可能性は高まります。しかも安上がりのものになってくるのではないかと思います。この課題を最初の問題提起とします。

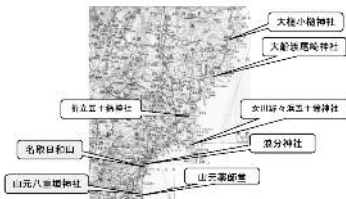
岩手県と宮城県について、沿岸部の地形図にある神社を追いかけて、そのなかで高さがどのくらいの差があるかを調べたものです（図③）。これも宮城県と岩手県ではずいぶん高さが違いますから、ここからすぐ高度の違いなのだという結論を導いてしまう。そんな単純なことではないと思います。岩手沿岸部の神社は漁村の神社、そして仙台平野の場合は平野農村部の神社を代表しています。このように考えると、漁村の神社はやはり海に対して、どういう関わりを持って神社として存在するのだということが示されていると思います。今日お話しする神社は、代表的事例としてお話をしたいと思います（図④）。

岩手県と宮城県沿岸部の神社の 津波被災状況

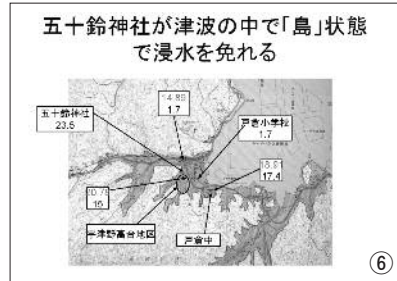
	岩手				宮城			
	数	沿岸部	沿岸	内陸	数	沿岸部	沿岸	内陸
神社数(件)	99	29	19	4	166	96	68	23
一級重要度(件)	26	16	10	0	11	6	5	0
海に面した神社(件)	99	29	19	4	166	96	68	23
人口10万人以上の市町村にあり(件)	52	16	10	0	80	41	32	7
人口10万人以上の市町村にあり(件)	15	15	15	0	15	15	15	0

③

スライドに登場する主な神社



④



これ（図⑤）は宮城の志津川の折立の五十鈴神社です。少し遠くから見たところですが、一番高いところに五十鈴神社があって、浸水の高さが20.78メートルです（図⑥）。一番下に折立小学校があります。この学校はとても授業ができないということで、今は解体され資材置き場になっています。このような海岸に近接する場所にある折立小学校の子どもたちは、五十鈴神社に上って助かったわけです。当時の浸水域。紫に塗ったところが浸水域です。その浸水域のなかで白くなっているところは比較的海拔高度が高いところで、あとはみんな海水が入るという場所です。ここだけは島状にちょこっと頭だけ出て、そこだけが助かるということになります。津波はこの住宅地のこの辺まで来ました。しかも津波は海の方からもこの丘の裏側を回ってこちらからも来ているのです。ここは海拔10メートル余りのところにある家ですが、この家の2階近くまで津波は入ってきています（図⑦）。この隣の奥さんが「どうなるんでしょうね」と言って、この鞍部に出てきてやられてしまったというところ。子どもたちは先生に引率されて神社まで上がります。この小さな社のところに小学生が91名、保育園児が18名、それから地区の住人が190人避難して、この人たちは全て助かったと



ということです（図⑧）。そういう意味では、自分たちが持っている神社がある意味では最後の安全地帯になっていたということになります。



この（図⑨）は上から見たところですけれども、階段があつて、東西両方向から津波は押し寄せて来たのです。ここのお宅もお邪魔してお話をうかがったのですが、すけれども、「まあ津波で15メートルくらいの高さがあれば大丈夫だろう」というお考えで、集落のある低いところからこちらに家を新築してお住みになっています。ここのお宅は2階建て。お年寄りがこの家にいらっしゃったのですけれども、たまたま2階にいて助かったということです。隣の家の奥さんがやられていますけれども、いずれにしても安全だと思っていた海拔15メートル余りのところにある家も浸水し犠牲者を出しているという事例でありました。



もう一つ、女川野々浜の五十鈴神社（図⑩）。この低地部に集落があつたわけですが、そこが全部やられてしまった。この集落の上にぽつんと白いものがありますけれども、これが社です。運がよかったというかすごい助かり方をしています。「これは新しいではないか」とおっしゃるでしょうが、ご指摘の通りです（図⑪）。社そのものは壊れてしまって、伊勢神宮の式年遷宮の準備で生じた廃材を使って、非常に素朴な社を作りました。古い神社は津波で浮き上がって漂うというような状態になりました、たまたま

周辺の鎮守の森の木に社が引っかかって、中にいた10名の方が助かった。表で様子を見ていた人は持っていかれてしまう、こういうところでありまし

た(図⑫)。これは新しいものですが、元の小さな社の中に入っていた人たちだけが助かるという、とんでもない事態が本当にここでは起こっています。ほぼ同じ高をもつ段丘面(海拔高度13.7m)が低地をはさんで遠方に見えます。ここにある鉄筋コンクリート建物は、その1階まで浸水しています。

これ(図⑬)は有名な、大槌の小槌神社です。大槌というのは大変に厳しく被災をするわけですが、どういうわけか小槌神社はやられていない。写真を見るとこのような状態で、上から見ると、参道に至る部分は何も残っていないわけですから、ここまでは水が来ていて、この社のある数段の階段の上のところまでは水が来なかったというところ(図⑭)。極端に高いわけではないというところがあります。ここは実はもう一つ驚くことがあります。水攻めの後は火攻めだったのです。つまり火が入りました。ところが、この火も鎮守の森によって止めているということです(図⑮)。なんとなく「神がかっている」とお考えになられるかもしれませんが、そうではなく、やはりきちんと鎮守の森も意味

があるのだと思います。あるいは神社が立地する小高いところというのはどういう役割があるのだろうかということを、少しお考えいただければと思い

急傾斜の階段を登り、社殿に避難して助かった者14名。しかし社殿外で様子を見ていた避難者は流される



⑫

大槌町小槌神社



⑬

津波浸水を免れた面から
大槌の集落をみる・極端に高いわけではない



⑭

鎮守の社が火災を食い止める
その後、火災を食い止めた木は伐採



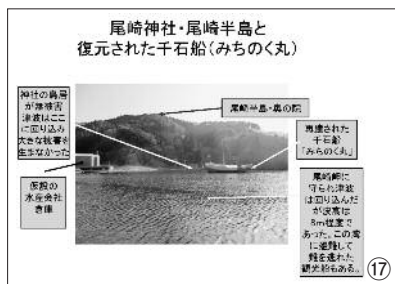
⑮

ます。



これ（図⑬）は大船渡の尾崎神社といふところだ。蛸ノ浦という入り江に面する神社だ。蛸ノ浦小学校の校長先生は菊池貫二先生という方だ。この方は普段は非常に柔和な先生ですが、この時は、親あるいはお年寄りが自分の孫や子どもを学校に迎えに来たり、玄関前で「帰して」と言っても、菊池校長は一言「絶対に帰さない。ここにいてください。あなたもだ！」と言って親をそこで止め置いている訳です。実は、この蛸ノ浦小学校は少し高いところ（海拔 28m）にあります。子どもを連れて沿岸の低地部に下りていったら、津波にやられるということを知っていたからストップをかけた。その子供もお父さん・お母さんも助かることになります。湾内に復元された千石船が係留されていましたが、この湾のなかには観光船も避難して、難を逃れているという状況でした。鳥居も残っているのですが、この鳥居のところも実は水が来

ているのです。つまりこの辺まで津波は侵入してきましたが、このみちのく丸も無傷です（図⑭）。奥の院はこの上にありますが、海から参道部分をもう少し見てみましょう（図⑮）。この建物は公衆便所ですが、ここにも津波は来ているのですが建物として残っています。壊滅的なものすごい力に対して抵抗力で防いだのではなく、津波を回り込む地形を利用しているのです。直撃の力をかなり弱めることができるという環境にあります。水はこの辺まで来ていると思います。その神社の社そのものは大丈夫でしたが、かなり



りぎりのところでなんとか防げるというようなところでした(図⑱)。つまり、漁村部の神社は、漁師たちの生産と関わって存在しており、地形や高度から安全を少し考える、あるいは積極的にそれを活用できる場所に神社はある。私たちはそれを「神がかっている」と思っているかもしれないが、それでは充分ではない。生産の中からあるいは経験や体験の中から津波対応と神社立地を編み出してきているのだろうと思われます。



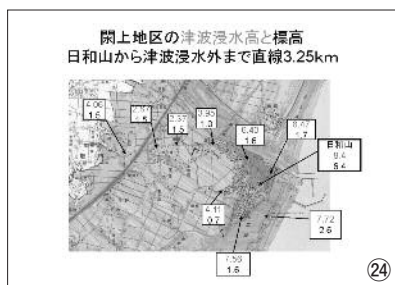
これ(図⑳)は有名な浪分神社です。仙台平野にあります。これは夕方の写真だからよろしくないのですが、今回の津波はこの神社のだいたい2キロ手前くらいまでを浸水させ、神社まで水は来ておりません。浪分神社周辺の地形図を見ますと、このような古墳があります(図㉑)。つまり古墳時代から海に向かって開発を進めていたわけです。ある意味では、1千年以上の歴史を継続して人間が海の方に先へ先へと開発を進めていったわけです。塩水が入る低湿地の土地をなんとか住めるあるいは食べられる地域にしてい



くということになりました。そのなかの浪分神社です。さらにずっと新しい江戸時代の集落が、一番海に近い部分にあるということです。もう一度、この周辺に古墳があるという環境を思い浮かべていただきたい。豪族が海を見ながら、「俺はこれからここを開発するぞ」という判断、あるいは決意を示したその跡が古墳の立地にある。しかもそれはかなり安全なところに作られていたということが大切です。



これ(図22)は閑上の日和山です。実際に頂上の2メートルくらい上を津波が越えていきました。ですから、木は残っていますがそれ以外の鳥居などはみんな流されてしまっています(図23)。後で木製の鳥居を設置しましたが、被災直後は何もないような状況になっています。これは魚市場です。閑上の赤貝は大変有名な商品ですが、そういうものもこのような復興状態のところから全国に向けて出荷され始めています。日和山がある閑上地区



はこのようなところであって、全部水をかぶるわけです。3キロぐらい内陸に行かないと安全地帯に達しないという状況に陥りました（図24）。ですから、この閑上地区の再開発は非常に問題になっています。これを、地盤を上げてさあ住みなさいという合意形成ま

でなかなか行かない。これは皆さんが「うん」と言い切れない。むしろ「俺は内陸部の標高の高い地区に住みたいのだ」という気持ちをお持ちになる方も少なくないだろうと思います。かなり高い波が来て、あの日和山を越えて水が来たということは、地域住民にかなりのショックを与え続けています。「地震があつたら津波の用心」というのは、今言つた日和山の裏側にあつた石碑の中にも書いてあるのですが、これもひっくり返っています。昭和8年の津波は、閑上は必ずしも大きな被害を与えなかったのです。また、この碑文(図25)には、「岩手県のほうはずいぶんやられたんだが」という内容の記載や「注意しなくてはいけない」ということは書いてあるのですが、そのことが忘れ去られてしまっているというところも、今回の被災を契機に、ど

の地域でも認識を新たにしなければいけないと思います。

もう少し南下下がった山元町です(図②⑥)。今度は農村部の神社になります。内陸から海に向かって高度を下げていきます。しかし、津波深は内陸のかなり高いところまで上がるにつれて数値は単純に下がっていくわけではなく、低いところを越えてまた高くなるというような変化があります。これは、浜堤という微高地が作られているためです。古い集落はいずれもこの高燥地である浜堤のうえに立地していますが、津波はこの微高地を乗り越え、そこにあった家屋の流失・破壊を生んでいます。八重垣神社も同じような立地条件に建っております(図②⑦)。神社の本体は破壊され何も残っていない状況で、ここの宮司さんもなんとか再建をと考えて氏子たちに「自分たちの神社をもう1回つくりましょう、鎮守の森を復活させましょう」と言っているわけですが、氏子たち自身もはたしてそこに戻って行けるのかという不安をお持ちになっている方が非常に多いと思います。

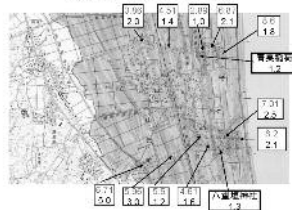
これ(図②⑧)が花釜の青果稲荷神社です。これも新しく作ったものであります。こういった津波に破壊された地域で、もう一度神社から作っていくということも見られますけれども、そこを安全地帯にどうすればできるかと

地震があつたら津波の用心
昭和8年の津波(間上では大きな被害なかったが)の
教訓を記した石碑が倒壊している



②⑤

山元町、八重垣神社と青果稲荷
周辺の津波浸水高と標高



②⑥

山元町八重垣神社
津波は神社を流失させ内陸深く侵入



②⑦

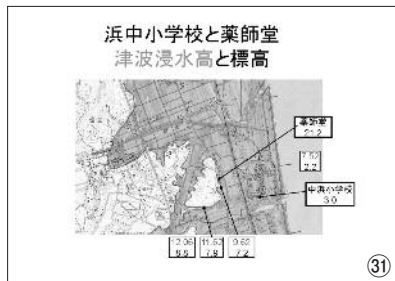
山元町花釜の青果稲荷神社

花釜集落の神社(津波被害場所)はすべて消失
津波の浸水深は0.5m、神社から内陸3.5kmまで浸水



②⑧

いうのはなかなか難しい課題です。



このような状況のなかで、山元町の中浜小学校を震災遺構として残そうという意見がありましたが、残念ながら残せないということになりましたが、では、中浜小学校の内部はどのようになっているのだろうかということを付け加えておきましょう（図②⑨）。これはものすごく運が良かった、危機一髪の場合にありました。つまり高台に逃げられなかったわけですが、この体育館の器具庫の中に逃げ込んだのです（図③⑩）。そこまではギリギリ津波は達しなかった。器具庫まで水が入るような状況だったら、ここに避難していた子どもと先生は相当ダメージを受けたと思うのです。中浜小学校はここです（図③⑪）。少し離れたところに、神社というよりも通常そこは薬師堂というお宮さんがあるのですが、薬師ですからお宮と言っていいのでしょうか。でも現地の人「薬師堂」と言っています

から、そのところの写真を少しお見せしましょう。薬師堂の入り口には鳥居が立っていて、そしていま私たちが見た中浜小学校がこのような状態に写っています。ぽつんとこれだけ残ったというか、鉄筋コンクリートも含め瓦礫として全部撤去したわけですが、そういうところでもあります。小学校からこの神社までは650メートルぐらいですから、情報が正確に確実に伝わり、避難の体制が日頃からできていれば、避難は可能だったと思われます（図③⑫）。海の状況を見てから判断するのではなく、30分あればなんとか子どもたちもここまで来られると思います。高台への避難行動を取らず

中浜小学校から650mの距離にある
「薬師堂」は被災せず



③②

「薬師堂」
避難者はここで3日過ごし、救助される
狛犬等の石塔は崩れ落ちている



③③

に、学校の中にいるという判断はたまたま運がよかったと私は思っています。では、この薬師堂に誰かいたのかというと、逃げ込んだ人たちがいるのです（図③③）。3日間そこで過ごしてそして助かりました。よく見ると、狛犬がころころと落ちたり鳥居が落ちたりしています。神社ではこの手の石像が相当暴れ回りますから、安全といってもこの辺のところを何かうまい方法で、ひっくり返っても大丈夫なようなものにつくり替えるとか、転倒させないようにしないと、安全な場所にはならないと思うのです。よくお寺さんも神社も比較的安全な場所に立地していると言いますが、墓石や狛犬は転倒したり落ちてくる。鳥居も落ちてくる。しかも地震は1回だけではないですから。何度も余震が起こるわけですから、そういう意味では、その辺のところの工夫をしないと、神社仏閣が安全立地といっても完全な安全地帯にならない。同時に、このような階段を上るというのはなかなか厳しいと思います。特にハンディキャップのある人、お年寄りにとっては厳しいことは明らかです。

さて、これまで報告した神社を並べると（図③④）、漁村の集落というのは神社を「見立て」として、あるいは海に出て行った漁師たちが神社を見て俺の村に帰ってきたのだと認識し、あの神社とこの山を結び付ければ自分の船は海のどこにいるのだということを確

認するような場所、あるいは確認するような地点でもあったのだと思います。ですから、ある意味で集落の上部に立地するわけだから、安全地帯に

神社の立地パターン

- A. 漁村上部立地型 漁村集落「見立て」の傍側も神子小籠、五ヶ所神社
- B. 沿道立地型 経路の危険を示す
- C. 地区神路型 集落とはなれて神聖な土地・地蔵を祀る神社を築く・聖域神社
- D. 漁村内部立地型 漁村の中心に集落
- E. 漁村外部立地型 漁村の外部に立地 昭和14年の津波で集落は高所に移転、神社は元の土地に残る（宮田、金山神社）
- F. 海上、見立て型 神事の上部「見立て」の傍側も神子
- G. 漁村中心部高地上立地型 漁村集落で漁船中心に祀られる
- H. 防衛型立地型（集落、高地上に立地） 集落の端・高地上に集落がある場合は防衛性や危険から集落を築く傍側も神子

③④

なっていたのだろーと思ひます。海のほうに向かつて神社があるという点も、この特色を示していると思ひます。立地類型 A です。それから、岩礁の上にあるというのも岩礁の危険を示すという役割を持っていたのでしょー。これが類型 B です。類型 C は、地区の神格化、これは集落と離れていますが、先ほど言った尾崎神社のような例です。このような所は、ある意味では神聖な地域として、あるいは小さな半島の裏側の安全地帯というやうなところで、しかもそれは避難できる場所として、神社を設定している例もあります。それから、漁港の埠頭に立地するやうな小さな分社を置いてというやうなこともあります。類型 D です。漁村の神社で例外的に浸水したものもあります。吉浜の新山神社のように集落が昭和 8 年のあと高台に移つて、神社だけは一番下に元の地点に残っているという例があります。類型 E です。水は入っているけれども、旧集落において高台に当たるので神社そのものは壊れていません。それから、岬の上に神社を建てるといふものもありました、類型 F です。最後の類型 G・H がまさに農村型です。集落の中心部の微高地にある神社であります。ここは農村集落全体がわつとやられてしまふ位の津波では神社も跡形もなくやられてしまふ。あるいは農村の神社の変形型の、例えば堤防の上に小さなほこらを置くとか、新しく掘った川の横に置くというやうな神社立地場合も、これは同様に被災しているところが多いのです。このような事から、農村型の神社が厳しく被災している。宮城県神社がずいぶんやられていふといふけれども、特にやられていふのは農村型の神社がやられていふといふえます。一方、岩手県の漁村型の神社、例えば海から見て自分の集落の神社がどこにあるかといふことが分かる地点に立地する神社は安全が確保されるといふことが、残存した神社数の上で明確であり、それから高さを計った数値の上でも言えることだろーと思ひます（図



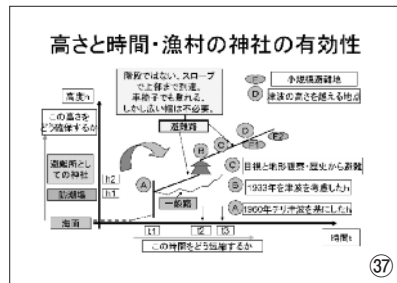
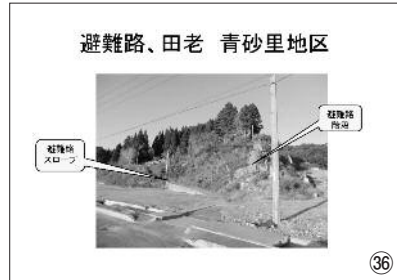
り、それから高さを計った数値の上でも言えることだろーと思ひます（図 35）。

この写真（図36）は先ほど大棒さんの説明された田老ですけれども、この神社には2つスロープを置いてハンディキャップのある人でも上れる。一

方、階段でも上れる。階段のこの辺まで水が来ているというのが、手すりぐちゃぐちゃになっているので、よくお分かりになると思います。この上は水が入っていませんので、この上まで上がって助かった人は少ないと思います。津波から命を守る原則は何かというと、津波よりも高いところに上れば絶対に大丈夫なのだ、ということです。

ではどのくらい時間をかけることができるかという点が課題になります(図37)。短ければ短いほどいいわけです。でもそれは一般の道を使った場合、上がったたり下がったりして高度をあげるには、だいぶ時間がかかる。しかしそういうところに避難路を設ければ、かなりの短い時間で一定の高さまで上がることができるのではないかと

いえます。つまり、図中の横軸の $t_3 \sim t_2$ へ避難時間を短縮することができる。避難路があれば短い時間で上がることができる。さらにもう一步、避難場所から上の方へ、少し通路を延ばして、避難した地点が危険になると判断したらそこからまた道を上って少し高いところに行き、津波よりも高いところまで自分を上げていくということはとても重要です。階段で上がるのではなくスロープで、わずか1メートルくらいの通路をつくるということが肝心なこととなります。1年に1回は通路を使って高みまで地域の人みんなで行く。そして、そこには備蓄倉庫が置かれており、乾パン等が用意されている。記念・慰霊のときにはみんなで缶詰と乾パンを食べて水を飲んで、被災を思いおこすとともに、備蓄品を新しいものに入れ替えることをやると、避難路も生きてくるだろうし避難体制というものがあるのが毎回毎回確認されていくと思います。神社の参道を避難路として整備することは、費用対効果の面を考えても有効だろうと思います。



神社の立地と被災

- ・ 神社の立地パターンで
- ・ 漁村の海岸上部立地型神社で甚大被害は少ない。
- ・ 漁村集落でのこの神社は海に出ているものにとって「見立て」の役割を持つものであった。海を見渡せ、海から見える位置にあるため、津波被害を最小限に食い止めている。神社が地域への海と深くかかわって立地していた。
- ・ 農村村の集落中心部微高地上立地型は甚大な津波被害を受けている。その中、海・津波に対する備えを十分に考える必要もなく神社が立地したと思われる。山台平野沿岸集落の微高地上立地の神社に犠牲が集中した。

(38)

災害をトータルにとらえる

災害文化

生活・生活

伝説と信仰

教育・学習

地域を知る

自然環境

伝説・地域文化

生活・生活

災害の経験

防災・減災

自然災害

平和・富強

地域が持つ課題

復興・備蓄

被災

復興

災害進化

39

コミュニティの内発力と
外部からの支援

コミュニティの内発力	(-, +)	(+, +)
	(-, -)	(+, -)
	外部からの支援	

40

外部からの支援とコミュニティの内発力を災害全体像の中でとらえる

外部からの支援とコミュニティの内発力を災害全体像の中でとらえる

外部からの支援
被災者の自立
被災者の復興

被災者の自立
被災者の復興

コミュニティ内発力
被災者の自立
被災者の復興

被災者の復興
被災者の自立
被災者の復興

41

40 *the 7th regional disaster management forum*

ミ少年になるのか、この辺はだいぶ違ってくる（図④①）。あるいはその情報受入れ体制ができていなかったら避難もできないし避難もせずと言う状況に陥る。これが本当に厳しい。誤った情報や情報が遅れた場合には、これは大変に厳しい結果になっていくと思います。先ほど言った両者がプラス・プラスの働く場合を考えればあるいはそういう方向で警報を考えてみたらどうでしょうか。復興の救援期の場合でも同じでしょう。つまり外部からの支援と内部でもう一回まちを立て直そうという、両者がプラス・プラスで働けば、復興に結びついてきます。しかしそれが内発的な力が十分に発揮できない場合には、まさにショック・ドクトリンとして、うまいところはみんな当該地域から中心地や大企業に吸い取られてしまうということになってしまう。外部からの支援もないし、自分たちももうだめだといったら、これはもう地域の衰退ということになってしまうと思います。それから、衝撃の発生直後では、一番最初のときは外部からの支援等は何もなく自分たちでやるしかないわけですから、コミュニティ内部の相互支援というものが大変重要です。こういったぐりりと回る構造のなかで災害をトータルに捉えることが、災害文化の醸成を可能にしている、いま報告したように地域の自然観も一つの要素になっていくわけですが、それは津波だけではなくて他の自然災害でも当てはまるだろうし、あるいは他の地域との比較をしながらもう少し確実なもの、もう少し発展性のあるものを創っていくということが大変重要な課題だろうと思います。

今日のまとめとしては、津波と神社、両者の関わりを考えました（図④②）。そういう中で、神社の立地というのは、避難場所としても非常に有効性を持っているところであります。そして災害文化の醸成において、地域に関わって存在する自然観が重要だと考

神社と津波

神社と津波、両者の関わりを考察した。

- ・津波災害において、海と関わる神社の立地は、避難場所としても有効性を持つことが多いし、それを地域住民が知っている。
- ・災害文化の醸成において、地域に関わって存在する自然観は重要な要素となる。
- ・この自然観は地域独自の課題を持つとともに、外部からの変容の力を受けるから、動態的に把握することが求められる。その把握は防災に強く結びつく。

④②

えました。それぞれの地域の特殊な課題を持つとともに、外部からの変容の力を受けますから、これらを動態的に把握することが求められています。その把握は、防災に強く結びつくというのが、今日の私のお話でした。どうも

ありがとうございました。

【山崎友子教授】 どうもありがとうございました。皆さまにとって神社というのは身近な存在でしょうか。このような切り口からも、その役割、私たちとの関わりというものが、防災という点に関して一つの答え、アプローチを示してくれるということが分かりました。ありがとうございました。

それでは次の登壇者、畠山信さんをご紹介します。皆さんよくご存じだと思いますが、「森は海の恋人」ということで活動なさっている水山の牡蠣養殖家でいらっしゃいます。皆さんご存じだと思いますが、ただ産業を元に戻すだけでは、人は戻ってこない。震災前の状況に戻すだけではなく、地域が持続的、自発的に運営、発展していく基盤づくりが必要だ。既存の水産業と観光業を軸とした新たな産業づくりが大切だということで、その地域の自立性の大切さということを考えて新しいNPO “Peace Nature lab”を作り、副理事長としても活躍されております。それではご講演「森は海の恋人と震災復興」を、森と海を愛する畠山さんからお願いいたします。よろしくお願いします。

「森は海の恋人」と震災復興

畠山 信（NPO 法人 Peace Nature lab 副理事長）



【畠山信副理事長】 ありがとうございます。宮城県の気仙沼から参りました、NPO 法人「森は海の恋人」の畠山信と申します。今日はどうぞ宜しくお願い致します。もう3年になりますか。東日本大震災におきまして、おそらくこちらにお集まりのなかにも、いろいろな面でご支

援頂いたかと思います。まずは御礼申し上げます。

今日は、防災とか減災も含め自然環境というものを一体どうするのだというところでお話をしてくれということ で来ました(図①)。実際、私の本業はカキ・ホタテの養殖をやっている漁業者でございます。先生方のように話が上手ではないので、緩く聞いて頂ければなと思っております。



ただ、私は根っからの漁業者ではなくて、漁業者になって独立してからまだ10年足らずの新米の漁業者であります。その前は何かをしていたかというと、環境アセスメントの勉強をしまして、学生のときの専門は何かと問われると昆虫です。虫野郎なのです。虫の生態学とか分類学、虫をやっていると、今度は環境アセスメントの場合は鳥を知らないといけないとか植物をやらなければいけない。両爬虫類をやらなければいけない、生き物が基本的に何でも好きなものですから、鹿児島県の屋久島あたりにいまして、今度、虫から人という動物が面白くなって、環境教育というジャンルに進みまして、暫く屋久島のほうで観光教育の仕事をしておりました。「森は海の恋人」というのはうちの父が平成元年から活動を始めていたのですが、環境教育のジャンルは、言葉は悪くて申し訳ないのですが、「なんちゃって」の部分がすごく多くて、実際はうさんくさいのです。それで、本当のことをきちんと伝えなければいけないと思ったときに、やはり生産者をやりながらだと本当のことを伝えられる圧力を持っているのです。ですので、地元に戻ってきてまして、養殖業者をしながら、NPOを立ち上げました。活動自体は平成元年からやっていたのですが、NPO法人化したのは2009年です。3年目に力いっぱい被災してしまいまして、うちの家も当然なくなりました。祖母も亡くなりました。当時は悲惨な状況だったのですが、やはり時間を追うごとに、うつむいてばかりではまづいのです。地域がどんどん衰退していく、人口の流出と少子高齢化が甚だしいです。もうすぐ限界集落だったところに津波が来て、さらに限界集落までワープしてしまったというか、そういう地域であります。

この辺(図②)は、NPO法人「森は海の恋人」とは何ぞやというところ

NPO法人 森は海の恋人

◆三陸リアスの海辺の環境悪化を防ぐために、平成元年から奥浜の海岸への清掃活動と海の環境教育を開始

◆平成21年に法人化(NPO)法人森は海の恋人を設立し、『自然の「恩」から、人の「礼」を育てよう!』をキャッチフレーズに、環境教育・森づくり・自然環境保全の3分野で活動

◆震災後はこれまで数回に多様なネットワークを活用して、森は海の恋人の理念を反映させた「森と共に生きるまなづくり」を推進

◆行政の示す単なる復興復興ではなく、リアスの海辺にふさわしい復興を目前して被災住民、大学、支援団体と協働



です。震災後の動きとしましては、環境教育もちろん進めているのですが、行政との関わり合いです。ご存じの方は多いと思いますけれども、今やっているのは、ほとんど復旧事業なのです。壊れた公共施設を元に戻すだけ。復興とは関係ないのです。予算

も違いますし。復興事業は復興事業で、これから先色々出てくるか、今やっとなんと少しずつ出てきたのかなという状況です。そういう行政との関わり合いとか、今度は政治との関わり合いも色々出てくるのです。これだけ大きなインパクトがあった後なので、色々なものがごちゃ混ぜになって非常にカオスな状態で、1個1個学ばないと分からないのです。本当にもつれた糸を1本1本解きほぐしていけないと、何が課題で何が問題か分からない。NPOも活動しつつ、その活動の範囲外で、震災復興というところに携わっており



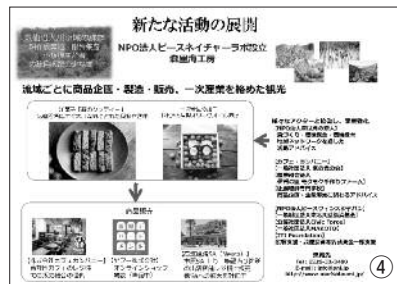
ます。「森は海の恋人」とは?」というところで申しますと、森・里・海(もり・さと・うみ)のつながりを感じて持つ人材育成、私はこれがやりたいのです(図③)。人材育成をやっている連中もそうなのですが、保

護保全系に偏ってしまうとあまりいいことがないのです。ただし、逆に偏るとよりいいことはないのです。偏りをなくしたいのです。なくすためには何かというと、やはり幼少のころの自然体験ではないかと思うのです。色々な報告書や論文とかが世の中にたくさんありますが、私の仲間の環境アセスをやっている連中もそうですけれども、幼少のころに自然体験をがっちりやっている連中が書いた報告書と、机の上で必死に勉強して、幼少のころに自然体験をあまりしないで保護保全系の仕事をしている連中とは、同じ仕事をやっても、何か全然違うものが出来てしまうのです。そういう偏りをなくしたいということで、特に子どもさんメインの環境教育という事業を

メインにしております。写真を見ればこんな感じです。活動をしていく中で、森・里・海連環学という学問、学問の世界も縦割りです。法学の先生は法律には詳しいけど自然のことはよく分からないとか、林学と水産学は仲が悪かったり。震災後、特に色々な研究者の方々が本当に色々なジャンルの研究者、色々な大学研究者の方々と一緒に調査させて頂いたりもしているのですけれども、あの大学のこの教授が嫌いだから一緒にやらないとか、そんなことばかりです。本当に縦割り、非常にくだらないなどと言うと怒られてしまって、またぐだぐだと言われてしまうのですけれども、私は漁業者なので、その辺は許してもらいたいと思います。森・里・海連環学という学問が横断する学問です。これは、京都大学で2002年だったか世界初と言っていた気がしますが、そこに起こされた学問だそうで、法学だろうが工学だろうが文学だろうが史学だろうが全てはやはり自然に起因するものなので、自然のことをよく分からないととんちんかんなことばかりになってしまうというのを防ぐといいますか横に串刺しにした学問というものが始まりました。すべては人づくりです。森は海の恋人運動が始まって、今年26年目を迎えますけれども、震災があつて、新たな団体を立ち上げました。

先ほどご紹介いただきましたけれども、ピースネイチャーラボ (Peace Nature Lab) という団体を立ち上げました (図④)。震災があつて、外からボランティアの方々がすごくたくさんいらっしゃったのです。地元の連中よりもはるかに優秀です。若い人たち

もものすごく優秀です。絶対に優秀な人の方がいいとかきちんとやりますから、そういう人たちを外に逃したくないのです。何をやっているかというと、私は漁業者ですけれども、クッティーというクッキーとビスコッティー (を合わせたような)、固いクッキーのようなお菓子をつくっています。そんなこともやっているのです。森里海工房という工房を立ち上げて、箱というか加工場をつくりました。日本に川の数はいくつあるか、川の流域を見ると、小さいけどいい食べ物をつくっている農家とか、一次業者



の方々がすごく多いのです。カキの燻製したもののオリーブオイル漬けとか、そういうものを海と、その流域単位で商品化していくということをしております。真面目にやりたいのですが、私たちは素人なのでなかなか本職のようにはいかず、正直に本職に頭を下げに行きました。味付けに関しては辻調理師専門学校とか、物販のノウハウを持っているカフェ・カンパニーという企業等、色々なトップランを走っている方々に恥ずかしげもなく頭を下げ、教えてもらって、今の活動を始めています。これは宣伝になりますけれども、Yahoo! の復興デパートメントという EC ショップ（インターネットショップ）でいろいろなものを売り始めましたので、ぜひお買い求め頂ければと思います。

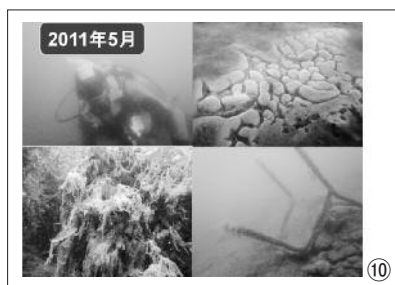


さて、2011年3月11日、非常に大きな揺れがありました（図⑤）。私は漁業者でしたので、船を守るために沖出しをしたのですが、失敗して第1波を食らってしまい、泳ぐはめになってしまいました。本当に寒かったですけれども、泳いでなんとか助かって、たまたま生き残ったものです。失うものは特にないので、がんがんといろいろなことを言ってしまうから、色々な人に怒られます。本当にすみません、申し訳ないです。津波が来て、気仙沼市内は本当にひどい状況になりました（図⑥）。先ほどの先生のお話



にもありましたけれども、津波のあとは火事になるのです。ひどいものでした。津波からなんとか生き残ってああ良かったと思ったら、今度は火が追いかけてくる。本当にぐったりしました。火事というのは本当に悲惨。火の海になりましたから。波と火事を防ぐ防災・減災とは一体どうするのだというところがやはり課題ではないかなと思います。震災の後何を考えていたかといいますと、ありとあらゆるものが海に流れており、海は見たこともない色

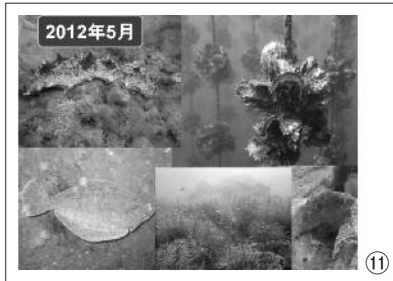
相談しまして、調査と同時にオーラル・ヒストリー調査、聞き取り調査のようなこともやっております。ポイントは、色々なジャンルの研究者に関わって頂くことであります。自然系の研究者だけでは動きが遅いのでダメですし、土木系の研究者の方々だけでもダメです。ただ一緒になると、結構うまくいくのです。あと、まちづくりの研究者、社会学の研究者とかです。ただし先ほど申したとおり、派閥が大好きな研究者の方もいらっしゃるので、そういう方にはごめんなさいと言って退いて頂きました。いろいろな研究者の



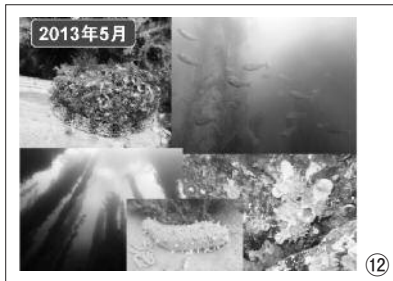
方に集まって頂くことがポイントだと思いました。実際、このような感じでした。これ（図⑩）は2011年5月の海底です。この頃はもう魚・小魚すらいない。エビ・カニすらいない本当に死の海でした。私は潜りもやるのですが、潜ると海底1メートルくらいは油

と水を攪拌した層がどこの海底にもあるのです。かなり広範囲でした。少し透明度が高いところに行くと、これはホンダワラという海藻ですが、ホンダワラに色々な油と微粒子、土の小さい粒みたいなものがガム状にねっとり固まっており、何だかよく分からない状況になっているところでした。これは、バクテリアのコロニーだそうです。バクテリアの種類までは分かりませんが、この時サンプリング道具がなくて、写真しか撮れませんでした。化石燃料というのは天然のものですので、それを分解するバクテリアがいるのですが、ただ少し時間がかかるということだそうです。もちろん瓦礫も色々なものが沈んでおりました。一番怖かったのは、海底に布団が敷いてあったことです。どきどきしてしまいました。布団と枕がセットで敷いてあったのです。その横に『広辞苑』が落ちていたりして、水深20メートルくらいのところだったので、どきっとしました。それから1年、生物の回復はものすごく早いです。おそらく陸上より海の中の方が早いのだと思います。生まれた～死んだのサイクルが速いのだと思いますけれども、2011年の7月～8月くらいからですかね、急激に生き物が回復し始めました。海底にあった油の層もほとんど見えなくなりました。流れていったのもありましたし、染み込

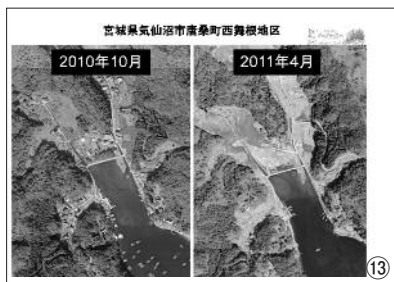
んだということもあるようです。今、海底の泥をパイプを突っ込んで引き抜いてサンプリングしているのですが、やはり油の層はあります。それを浚渫して取り除くということはあまりにも広範囲なので、おそらく不可能だと思います。それで2億年先、数十億年先の人類のために、燃料として海底に貯めておくくらいしかできないのだと思います。そのくらい広範囲です。2012年の5月の写真ですが、カキの成長がいいです（図⑪）。2倍速くらいですか。一気に成長するのです。要



はプランクトンがたくさんいるということです。本当に津波の後は急げと漁業者の中ではずっとと言われていまして、何を急ぐかという、養殖の復旧を急げ、すぐに筏をつくれ、すぐにカキの稚貝を仕込めと言われていたのです。理由がよく分かりました。ものすごい勢いでカキが成長しておりました。魚についても稚魚が大量に見つかって、稚魚がいるということは親がいるということですから、魚も結構復活してくるのかなと思ったら、親がばんばん出てくるのです。カレイ、ヒラメ、アイナメ、底もの関係はすごく回復が早かったです。これは2013年の5月で、アワビもいました海藻の回復と生息地がやっぱり変わりましたね（図⑫）。震災の影響で地盤沈下して、海底の地形もだいぶ変わりました。干潟だった部分が干潟でなくなり、ガラモ場になりました。ガラモ場という



のは、ホンダワラとかいろいろな海藻が生えているところです。水深が変化したのです。写真の真ん中にはマナマコです。感動したのですが、これはナマコのふんです。こんな立派なナマコのふんを見たことがないです。本当に健康です。またホヤも生き残っておりました。これは航空写真ですが、私が住んでいる集落です。私の家は流されたのですが、実家がたまたま、父の家が高台にありましたから、残っていたのです。2010年の10月、震



災の前と後の写真です（図⑬）。やはり家がある場所で見ると、谷間になぞるように家があったのです。津波の遡上高は16メートルいくつだったかと思いますが、たいがいの家は全部なくなりました。また、津波は色々なものを奪っただけではないのです。色々な

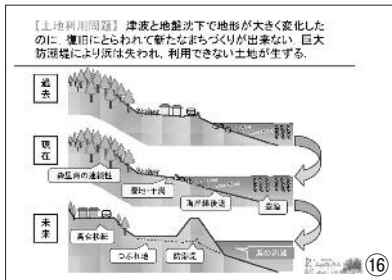
ものを残してくれたのです。これは非常に嬉しかったです。2010年10月には草原のように見えるのですが、これは実は使われていなかった放棄された畑とか田んぼです。2011年の写真を見ると、水溜まりになっています。これは海水です。要は地盤が下がって、1メートルくらい沈んだので、満潮時に海水が入ってくるようになったのです。これは財産ですから、今、湿地を保全する活動をしています。河川護岸もぐだぐだに壊れましたから、河川護岸が壊れた隙間2本くらいに、秋になるとサケも遡上してきますし、人から見て有用な生き物もその他ものすごく回復しているのです。これは財産、まさに自然資本だと思いました。ただ残念なことに、災害復旧事業は壊れたものを元に戻す事業で、誰も使わないのです。地権者も使わない田んぼとか畑もまた盛土して元に戻すという事業が残念ながら行われており、防潮堤の問題もそうなのですけれども、みんなおかしいなと思っているのです。行政の方も色々な議員の方もおかしいなと、住民の方もおかしいなと思っている連中はたくさんいるのですが、事業が進んでしまうのです。そこが問題なのだというのを、先日土木学会で社会学の先生が言っていました。おっしゃるとおりだなと思いました。疑問だけれど、おかしいなと誰しもが思っているのだけれど、なぜか事業だけが進んでしまう。その仕組み自体も確かにそうです。政治は少し絡んでくると、NPOというのは政治御法度なので、そういう活動はできませんけれども、政治もある程度絡めないと物事は改善しないのだなというのは今回の震災ではっきり分かりました。この湿地は農地復旧されてしまうということだったので、うちの父に宵越しの金を全部出せと買い取ってもらいました。個人の土地なので動かさない、そのままにするということが決まりました。そうでないと自然というのは守れないの

です。本当に世知辛い世の中になったものです。そこでは今、新たな自然環境が作られたわけで、またこの湿地が面白いのです（図⑭）。山に近い方は淡水です。淡水の湿地なので、トウホクサンショウウオとかの卵塊があったりします。そして海に近付けば近付く



ほど、今度は海水が混ざってくるので汽水の湿地になっているのです。つまり淡水・汽水・塩水が連続する湿地が形成されたのです。そこは本当に、生き物が爆発的に増えております。また、子どもたちの環境教育の場でも、フィールドとしても活用しております。まだ瓦礫があります。それをなんとかしないといけないと思っていますところ。さて、防潮堤の問題、気仙沼では今、盛り上がってきました（図⑮）。どうしようもないのかなと思います。ちなみに私が住んでいる集落は防潮堤なしで決まりました。なぜならば、私がアセスメントの仕事をしていたので、行政の動きがなんとなく把握できるのです。この文書が出たら1か月後にこの文書が出るようなことが見えるので、2012年防潮堤の話が盛り上がってきたときに、住民100パーセントの合意をとり撤回の要望書を作成し、儀式的に市長に手渡すということをやりました。100パーセントの合意を取るというのはすごく大変です。人数が少ないからできるということもあるのですが、それでも100パーセントというのはそうそうあり得ないですから。1人くらい「俺は欲しい」という人がいますから、それもなんとかクリアして、防潮堤なしの集落ができました。これはある意味、観光資源でもあります。防潮堤のない集落という名目で、観光で売っていいのです。また、自然環境は非常にいい状態ですので、それも観光資源として使える。この先はやはり、漁業だけではなかなか生計を立ていくのが難しいです。海の酸性化の問題、これはカキ・ホタテの養殖をやっている者にとつ





ては非常に嫌な問題です。ですから、漁業と観光を組み合わせる、また、色々なものと観光を組み合わせるしかないとは考えております。自然環境のことを言いますと、過去、現在、未来とこんな感じです（図⑬）。現在からいきますと、いわゆる森里海の連続

性というものが確保されたのです。地盤沈下して、人工物が破壊されて、そこにはウナギを人工的に増やそうなどということを考えてもあほらしいのです。根本的な解決になっていないのです。生息地を守らないと意味がないのです。というのが今、自然にできあがった、自然の力でできあがった。未来はどうかというと、人は高台移転、うちの集落も高台移転を皆さんしていますけれども、防潮堤ができてしまうとどうということが起きるかということ、防潮堤は決まりで海辺につくらなければいけないのです。セット化とかいろいろと話は出てきましたけれども、それでもやはり海辺なのです。海辺というのは軟弱地盤で柔らかく、矢板を打つのです。矢板というのは30メートルくらいの鉄板を打ち込んでそれを基部にし、その上に土を盛ってそれをコンクリートで覆うという構造ですけれども、矢板を打つと何が変化するかというと、地下水を止めてしまうのです。地下水を止めるとどうことが起きるかということ、沿岸漁業に非常に大きな打撃があります。色々な筏がたくさん浮いている中で、海底から直接真水が湧いているところもあるのです。調べると分かります。真水とか汽水とか陸由来の栄養源がたっぷりの水が海底から湧いている場所がたくさんあるのです。それを止めてしまうことにな



るとまずいです。そういうことが実際に起ころうとしています。これは気仙沼の大谷海岸で、9.8メートルの防潮堤を作るといっています（図⑭）。海岸も管理者はたくさんいるのです。気仙沼だけで管理者が7つくらいありますから。宮城県が管理するところ、気

仙沼市が管理するところ、防潮堤をつくるのというのは、国の予算で全部今回作りますけれども、管理するのは管理者、管理費は管理者が負担することになるので、壊れたら管理者、つまり宮城県とか自治体・市町村が直さなければいけない。どんどん人口が減っていく、その予算をきちんと計算しているのかいって聞くと、「やらなければいけないですね。ご意見を深く承りました」と言って終わりという、残念な結果になっています。この大谷海岸は宮城県が管理する海水浴場だったのですけれども、砂浜をがっちり潰す計画です。これは面白かったです。面白いと言っては怒られますけれども、本当にやるのかと思いました。宮城県で一番大きな防潮堤は14.7メートル、棒を立ててみるとこんな感じです（図⑱）。結構高いです。図面を作ってみました（図⑲）。土木の先生がお友達なのでつくってもらったのですけれども、この防潮堤で何を守るかというと、お年寄りが何人かでやっている畑を守るのです。ちなみにその建設費用は230億円です。津波で浸水したところに新しい家は建てられませんか、人家を守るためではないのです。田んぼとか畑を守るためなのですが、背景には、防潮堤が建設される場所の土地を売りたいという住民の方の気持ちが強くなるみたいです。ただ、どうでしょう、国費をある特定の方に振るまくような感じになってしまうので、評価は他人がするものですから、今後どうなるかはモニタリングしていく必要があります。今、防潮堤できているものは、気仙沼市野々下海岸（図⑳）。これも面白いです。林野庁が管理して



⑱



⑲



㉔

いるところなのですけれども、防風林を守るための防潮堤なのです。防風林というのはどこかあるのかというと、ないのです。木はもう流されてしまったので。仕組みだから作るということです。これは後で色々な方をご紹介したい、10メートルくらいの高さがあるので、写真ではわからないですけれども、行くと面白いです。「わお、でかい」という感じの防潮堤です。ちなみに、この防潮堤よりも5メートルくらい高いところに人の家があるので。つまり防潮堤というものは、津波を乗り越えたら終わりなのです。乗り越えなかったらいいのですけれども、乗り越えたら終わりなのです。



さて、時間が過ぎてしまっって申し訳ないのですけれども、ここは私が住んでいる西舞根という集落です（図②①）。未来に何を残すべきか。やはり考えてしまうのです。私たちもそうですが、私は今年36歳ですけれども、20代とか若い連中は、私たちの動きをすく

く見ています。どういう仕事をしているのか、どういう動きを・発言をしているのか見て、私たちも先代を見ているのです。こういう大人にはなりたくない、そういう人は結構たくさんいますので。それが後の世代まで続くので、やはりカッコいい背中を見せたいのです。何を残すべきか。一つ考えたのが、次世代が自発的に活動するための余地。日本の海岸線を見てください。コンクリートばかりです。あれは悲惨です。コンクリートがあると浄化作用を失われますので、赤潮発生の原因にもなっています。次世代が自発的に何かをしようと思ったときに、できるフィールドがある。それだけで相



当違うと思います。それこそが私は持続可能性だと感じております。森は海の恋人。今年からフィリピンで理念を伝える活動を始めます。英語にすると「The forest is longing for the sea, the sea is longing for the forest.」いま、高校1年生の教科書の Lesson

8にも掲載されておりますけれども、この英文は、皇后美智子さまが訳してくださいました。longing for をぜひ辞書で引いていただきたいと思います。時間が超過して申し訳ございませんでした。ご静聴ありがとうございました(図22)。

【山崎友子教授】 畠山さまありがとうございました。最後の英語、私も英語の教師なのですが、うちの大学生に訳させましたら、あの訳は出てきませんでした。そういう訳ができるには、やはり言葉には中身が必要なのだということだと思います。

生命が回復しているということの色々なご紹介の中で、では人間がどう対応しなければいけないかというご指摘をいただきました。この後のパネル・ディスカッション、またどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。もう一度拍手をお願いいたします。

それでは皆さん、様々なご意見、ご質問がおりだったと思います。どうぞテーブルは前の座席の背にありますので、引き出して書けますので使ってください、たくさんご意見ご質問をください。

続いて、「自然認識の多様性を考える～サンゴ礁地域からアフリカまで」ということで、堀信行先生に講演をお願い致しました。先生の業績やプロフィールは、皆さまのお手元にあると思います。今日は45分間という堀先生に申し訳ない時間しか差し上げられなかったので、ご紹介の方はお読み頂くということでもいいでしょうか。沖縄の写真がポスターにも使われていました。そこから、様々な私たちの視点を広げていくお話をしてくださることと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

第2部
講演会

自然認識の多様性を考える～サンゴ礁地域からアフリカまで

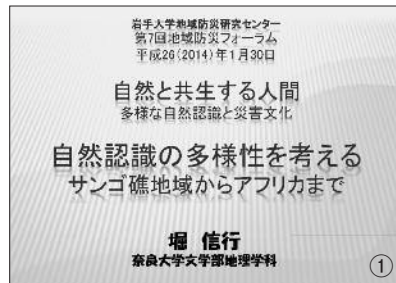
堀 信行（奈良大学教授 文化庁文化審議会専門委員）



【堀信行教授】 皆さん、こんにちは。今日は大胆なタイトルを掲げてしまっ、さてどうしようかという思いで、今ここに立っておりますが、要するにこういうことが分かれば私は苦労しないというタイトルなのです（図①）。私はこういうことを知りたくて研究をしているので

す。まず私はこれまでサンゴ礁地形を研究し、サンゴ礁地形の形成モデルをつくってまいりました。アフリカについては環境変遷の研究ということですが、きっかけは、ケニアでのサンゴ礁地形の研究も一段落して、アフリカの内陸のとくにカメルーンの熱帯雨林地域に行きまして、環境変遷の研究をしているうちに、地面に刻印されている人為作用の大きさに驚き、人間が何を考えているかを考えずして環境を説明できないという思いが強くなりました。わが日本を考えてみた時もそうだなと思うことがあり、こういうテーマに非常に強い関心を持つてきました。

皆さんのプログラムのレジメには、こんな文章を急ぎょ書きました（図



概要

日本の南の島々、沖縄や奄美に残る「ゆいむん」の考え方は、おそらく日本各地に広く分布し、自然観の基層をなすものであったと考えられる。この「ゆいむん」の考え方を基軸に日本の自然観、さらには世界観を考えてみる。

また演者がこれまで研究を行ってきたアフリカの熱帯雨林からサバンナ地域における自然認識の事例や、ヨーロッパにおける樹木信仰などにも言及して、自然認識の多様性の考察を試みる。

②

②)。今日の話題はほとんど沖縄、奄美の「ゆいむん」という伝統的な考え方を抽出し、その考え方の重要な概念を抜き出し、それを「ゆいむんの思想」と呼び、その考え方を、今日は皆さんにお話ししたいと思っています。この考え方について詳しくは、私の論

文（堀 信行、2012、人間と自然の関係性に見る循環思想の一考察：「ゆいむん」の世界観をめぐって。『地理科学』、67 巻、3 号、129－141 頁）を参照していただければ幸いです。この「ゆいむん」の考え方をベースに見ていくと、色々なものが見えてくることを今日はお話したいと思います。そ

人間は、自らの生活経験を通して環境世界を感知し、想像力を常に働かせている。人間を取り巻く環境世界は、自己完結することはない。

人間はさらなる周辺世界に関心を向け、既知の世界と新たな世界との整合性を吟味し、認識世界は再構成される。

不断に続くこの過程を通して、人間は認識世界の充実をはかり、人間の落ち着いた位置を希求して止まないように見える。

③

世界を感知し、想像力を常に働かせている。人間を取り巻く環境世界は、自己完結することはない。」このように思う人もいるでしょうけれども、どうでしょうか。「人間はさらなる周辺世界へ関心を向け、既知の世界と新たな世界との整合性を吟味し、自分を中心に考える。」と、認識世界はまた再構成されていく。これは不断に続く過程で人間は認識世界の充実を図り、人間の落ち着いた位置を希求してやまないように見えます。つまり、自分のふるさと（故郷）、自分の位置、私はどうするのだ、ということ問い続け、そうすることによって、人間は落ち着くのでしょう。その辺について、人間を個人のレベルに読み替えて頂いても、集団というレベルで考えて頂いてもいいし、その集団をもっと大きく、日本という国レベルで考えてもいいでしょう。

環境世界の中で最も身近な大地にまず関心を向けたいと思います（図④）。

まず環境世界のもっとも身近な大地への関心を事例に考えたい。

とくに大地を構成する土と石に関する方名（方言名称）に注目し、奄美・沖縄地域の事例を検討する。

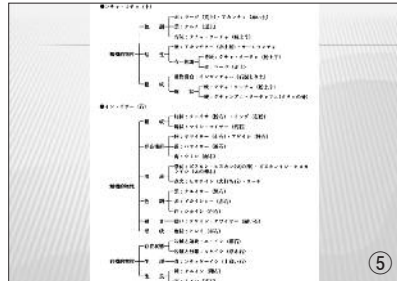
④

れに絡んで、アフリカもとかヨーロッパもと盛り込み過ぎ、45 分間では無理だろうと思ったのですが、何とかそれについても触れてみたいと思っておりま

す。大上段にふりかぶった表現ですが、レジメ（図③）のとおり、「人間は自らの生活経験をと

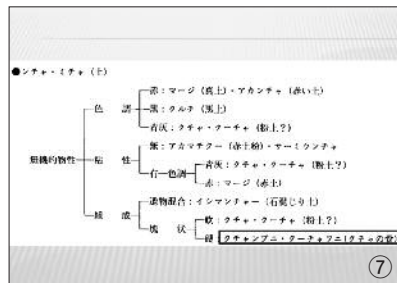
私は地理屋なので、地面というものに対して深い関心があります。土や石を、世間では、土だとか石ころとかとおっしゃいますが、そういうものに、いかなる存在意義や、世界を感じているかについて、少し例をお話したいのです。この一覧表のデータは、実は

沖縄で卒業論文をやった昭和39年から40年頃のものを中心です(図⑤)。その頃私は沖縄本島中部の地形を調べており、何ら方言研究のためではなく、意思の疎通をはかるためでした。土地の人と話そうとすると、例えば、石灰岩とか石英と、そのまま学術的な岩石名を使ったのでは土地の人には通じないわけです。そこで、「何タンチャ」と言えば、「ああ、それか」といって、すぐ通じるので、結果的に、私は方言を集めて歩いていることになりました。それを後ほど整理をして、表にしてみると、こんなことになったと



いうことです。その中に、ンチャケーイシというのがあります(図⑥)。つまり、土を食べる石という表現とか、石の種のタニイシ、石の実のミイシ、ミノイシというように名前を付けてあります。これはどういうことかといいますと、石灰岩が溶食で表面が溶けてポコポコとくぼみができます。それらのくぼみの中に土が入り込んでいると、土地の人が「土を食べている石」ンチャケーイシと言ったりします。種のようになっている石、この石がどういうことを意味しているか、種に似ているからだとか皆さんは思うと思いますが、この意味にはもっと深い意味があると思います。種石がだんだん大きくなっていくというのが暗示されているわけです。つまり、小石が大きくなると考えているわけです、成長するのです。

それから、土のほうですけれども、例えば、クチャンプニとか、クチャンフニとかがあります(図⑦)。これは地学用語では、泥灰岩のノジュール(nodule)のことです。方名の「クチャ」というのは、この場合は第三紀層



の泥灰岩のことです。「クチャ」の後の「プニ(puni)」というのは骨(hone)のことです。(H音がP音またはF音になりまして、骨が「フニ(funi)」となります。そうすると、クチャの骨、つまり、土から成るボディ(身体)としての大地が人間に代表される生物のボディ(身体)の骨のイメージと重なっているわけです。私たちは、それを簡単に、ただ骨の形に似ているからそういう名前を付けたんだという解釈になりますが、沖縄に行つて私が非常に感銘を受けるのは、こういう名前が単に似ているからだけではなくて、大地のイメージが、身体化、あるいは、生命化しており、それがどんどんと変化し、成長することがイメージされていることです。例えば、波照

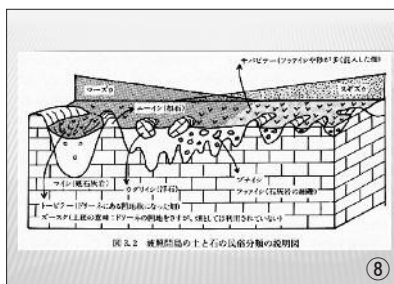
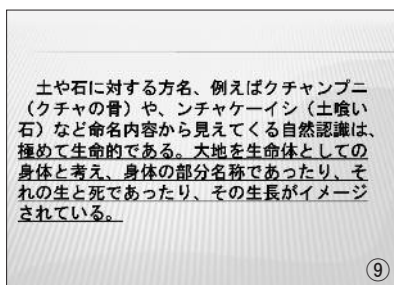


図2 波照間島の土と石の風俗分類の説明図

⑧



⑨

間島で聞き取りをした内容から、石や土の分布状態をモデル図にしてみますと、この図のようになります(図⑧)。例えば、ニーイシというのは、根を張って生長している石のことです。一方フグレイシとかウグレイシというのは、浮いている石、つまり死んだ石、死に石といいます。私は、当初こうした表現は単に例えとして言っているのかと思っていました。沖縄に行つて、鮮明な印象を受けたことは、繰り返しのようになりますが、土や石を生命体として認識していることです(図⑨)。言い換えれば、命名の内容が非常に生命的

で、大地というものを生命体としてとらえ、石が土を食べ、石が生長して大きくなっていくというイメージが、聞き取りの中でも出てまいります。皆さんが良く知っている日本の国歌は、この内容と重なります。「さざれ石(細れ石)の巖(いわお)となりて苔のむすまで」というのは、さざれ石という小石がだんだんと大きな巖となって、すなわち石が生長して、最後は巖に苔がむす、つまり、植生に覆われるまでという意味のことを述べています。日本人のなかに眠っている、あるいは忘れてしまったかも分からない認識が、

国歌に詠まれております。

ところで、沖縄に行きますと、村々に必ず火の神にあたる三ツ石というものがありまして、ヒヌカン、あるいはピヌカンと呼ばれております（図⑩）。

三ツ石に興味を持っている私にとって、ここ盛岡の三ツ石神社は見逃せません。三ツ石と、岩手県の岩手との間に深い関係があることを知りました。かつて学会でこちらへ来たとき、まっ先に三ツ石神社に飛んで行ってその三ツ石を見てまいりました。三つに裂けた大石を見てなるほどと思っておりませんが、今日はこの話を始めると止まらなくなるので、万が一質問があったらということで先に進みます。

さて、沖縄の多くの村々には、火の神、三ツ石が置いてあります（図⑪）。三ツ石の1つ1つが特別な岩石かと思いきや、実は何のことはない、私が普通に調べているサンゴ礁をつくる礁石灰岩です。石の種類が特別なのではなくて、それらの石が海水中から、一般化して言えば淡水も含む水界から拾われてきたものなのです。水界、とくに海水中にある石ころであつた石というところがポイントです。それは神さまの石ということになっています。なぜそうなるのでしょうか。

石に対する認識であります、三ツ石、つまり、火の神と申しますと、カマドの石になります（図⑫）。カマドと女性との結び付きはとても強い。実は、火の管理は女性の権能であると、柳田国男は、『火の昔』（1944）の中で述べています。男は不用意に火を扱えません。最終的に女性が火を扱うことを認識した上で、例えば囲炉裏の火でも男は微調整するだけであって、本

次に、三ツ石に関わる習俗について考察する。三ツ石とは、沖縄の各集落、各家庭に存在する火の神（ヒヌカン、またはピヌカン）のことである。

なお、この盛岡の地にも、三石神社があり、境内に三石があり、「岩手」という地名の由来と深く関わっている。

⑩



ピヌカンまたはヒヌカン(火の神)の三ツ石、この石は礁石灰岩で、海水の作用を受けて丸みのある形が使われている。(沖縄本島中部勝連半島の内間)

⑪

民家形式において、主屋（ウフヤ）と火処としての台所（トングワ、またはシムなど）を分けた二棟造りにおけるカマドは、元来三ツ石であつた。カマドは、女性の名前にも使われ、主婦としての女性の生死は、カマドの生死でもあつた。火と女性との深い関係を知る。また三ツ石は、水界にあつた石が選ばれるのが原則であつた。

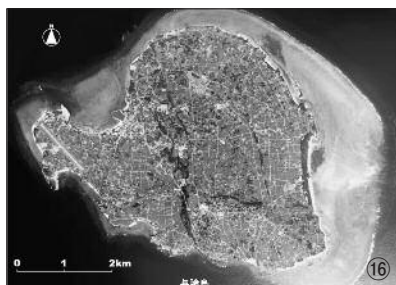
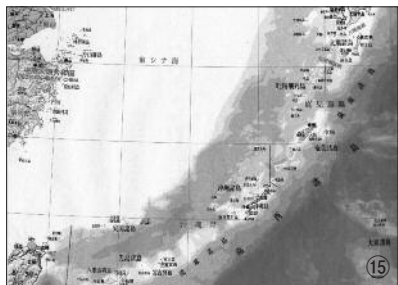
⑫



那覇市		
垣花町		
石川達郎	宮里ノブ	新垣清吉
石川カマド	宮里眞勝	新垣清治
仲村榮治	宮里アキ子	平良カマド
山田オト	宮里マサ子	平良誠実
山田節子	高良 牛	比嘉眞一
島袋栄喜	玉城祥清	宮里モウシ
島袋栄吉	金城ウシ	儀間三郎
島袋文子	原国直子	儀間オト
	原国政明	儀間清秀
	上原オト	宮里三郎
	上原初枝	兼城カマド
	上原キク子	兼城薫松
	上原由達	

格的に火を扱うのは女性にあるという認識が、長い間日本のなかにありました。沖縄本島の南部にある平和公園には、第二次大戦時の沖縄戦で亡くなった方々のお名前が刻まれております（図13）。それらのお名前の中に「カマド」という女性の名前をかなり多く見つけることが出来ます（図14）。沖縄の人にこの話をしましたら、「あなたは発音が悪い、カマドではない、カマドゥです」と言われましたので、今日はカマドゥと言います。以上のことから、女性と火、火の神とは深く結び付いているということです。

その次に、「ゆいむん」というのは、皆さんは何のことか分からないと思います。「ゆい」というのは寄ってくる、寄宿舎の「寄」という字がありますが、寄る・寄ってくるの意味で、沖縄の発音で「ゆい」とか「より」といいます。「むん」というのは、もの（物）のことですから、「ゆいむん」とは、寄ってくるもの、漂着物のことです。さて、沖縄本島のすぐ北に与論島という島があります（図15）。鹿児島県の最南端の島です。この与論島を、かつては「ゆんぬ」と申しました。これが与論島です（図16）。これは、私の大切な調査地域の島で、数ある沖縄・奄美の島でサンゴ礁地形がこれほど美しい島はないだろうと思っている島の一つです。実際、衛星画像で見て



も、ため息が出るほど美しく見えます。サンゴ礁地形の大きさ、とくに水平幅が違うにもかかわらず、私の提示した礁地形の形成モデル（1970、1977ほか）を証明する島でもあり、今話題になっている活断層もあったりして、色々な話題にこと欠きません。

今日はこの島の古名「ゆんぬ」について述べます（図⑦）。

この島の古名を「ゆんぬ」と知ったのは、私が泊まっていた民宿のおばあが「あんたたち、何でこんな島に来るんや。何んもない島に…」と云われ、「素晴らしい自然があるじゃないですか。」と私が答えたら、おばあが「このゆんぬてゆるしまや、いに（小）くさやあしが、なび（鍋）のすくなか（底中）にぐく（穀）ぬたま（溜）る」と言ったのです。「えっ、何ですかそれは」と聞くと、「こんな小さな与論という島には、何もないのに、鍋の底に五穀の宝がたまっている。そんな宝の島だと言われてきたけど、本当だったんだね。こんな島にあんたたちよく来るね。私たちにとって、あんたたちは宝だよ。」との返事。そのときに、与論島のことを「ゆんぬ」ということを知りました。と同時に、その島の東海岸に百合が浜という場所がありまして、地図にもユリの花のユリ（百合）の字が書かれています。私は、当初「百合ヶ浜」と書いてあるので、ユリの花が咲いている浜だと思っておりま

与論島の島名と百合が浜

与論島の方言は、「ゆんぬ」

島歌に

ゆんぬてゆるしまや

いに（小）くさやあしが

なび（鍋）のすくなか（底中）に

ぐく（穀）ぬたま（溜）る

与論という島は、小さくて何も無い処だけれども、

鍋の底に五穀のような宝が溜まる島だ。

「ゆんぬ」は、「寄りぬ」に由来する。⑦

「百合が浜」は、「寄りが浜」

島の東部の大金久海岸の全体、あるいは北半分を「百合が浜」と呼んでいる。しかし、百合が浜の本来の姿は、大金久海岸の浜辺の前面に広がる礁湖（イノー）の中に南北方向からの潮流が集まり、海面上に出る砂堆が形成される。この砂堆がつくりだす砂浜を「ゆ（寄）りが浜」と呼んでいた。「寄りが浜」の形状は毎年異なるので、その形状から、その年の収穫の豊凶を判断していた。

⑧

というんだって」「でも何にもないけど…、どこかにユリの花があるんだよね」と言いながら歩いて行ったのを、島の人が聞いていたのでしょう。その翌年だったと思うのですがユリの花が百合ヶ浜に植えてあったのです。早速植え

した。ところがだんだんと本来の意味が分かってきました。実は、波が寄ってくる「寄りが浜」の当て字として、百合が浜としたのです（図⑧）。余分な話で申し訳ないのですが、ある日、私は百合が浜にいましたら、観光客の若い女性2人が、「ここ、百合が浜っ

「ゆいむん」に関わる地名群

「与那は奇地の義」(宮城、1988)

与那、与那原、与那覇、与那覇堂、与那城、
世名城、与那嶺、与那川、与那堀、与那田、
与那地、与那浜、与那良、与那国、与論、
与路

その他

由比、由比ヶ浜、関上など

(19)

なぐすく・よなしろ)、与那嶺、与那川、与那堀、与那田、与那地、与那浜、与那良(よなら)、与那国。与那国島も、与論島も「ゆいむん」につながっているのです。本土でも、東名高速道路の、由井(または由比)正雪(1605?~1651)の出身地といわれる由比も「ゆいむん」の「ゆい」に由来します。由比ヶ浜、百合が浜ともいったりしますが、あちらこちらに「ゆいむん」に関する地名があると思います。それから、先ほど山崎先生のお話にも関上(ゆりあげ)という地名が出てきたと思いますが、この地名も「ゆいむん」の延長上で理解できる地名です。このようなことから、「ゆいむん」の考え方は、沖縄・奄美だけの話ではなく、広く日本の海岸地域に住んでき

たんだ、面白いなと思っていたら、あっという間に枯れてしまい、もうそれ以降は見なくなりました。

ところで、沖縄にはこういう「ゆいむん」に関わる地名が多くあります(図⑭)。例えば、与那原(よなばる)とか、与那覇、与那覇堂、与那城(よ

三ツ石のさらなる意味を考察するために、
久高島で旧暦の2月10日前後と12月10日
後のミニー(みずのえ)の日と、年に二
回行われる「ウブヌシガナシー」という健
康祈願と航海安全祈願の年中行事を取り上
げたい。

このうち旧2月の方を御願立(ウガンダ
ティ、またはウガンダテ)という。

この年中行事の最後の場面は、東海岸の
イシキハマ(伊敷浜)で行われる。

(20)

た人たちが長い間大切にしてきた、一つのものを受け止め方に「ゆいむん」というアイデアがあるのだということを、強調したいのです。三ツ石の話題にさらなる文化的深みがあるのではないかと、私なりに何年間も考えてきました(図⑭)。

イシキハマに伝わる五穀の種
の入った壺の漂着伝承は、ニライ・
カナイという水平の彼方が、男性
的なもの、すなわち種を「ゆいむ
ん」としてもたらす象徴的世界で
あることを示唆している。

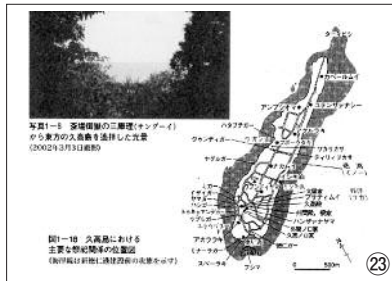
(21)

あるとき、久高島にウブヌシガナシーという健康祈願とか航海安全のお願いをする年中行事がありまして、2月上旬に始まる行事を、その年の最初のお祈りということでウガンダティとかウガンダテ(御願立)といいます。その年中行事の最後はイシキハマ(伊

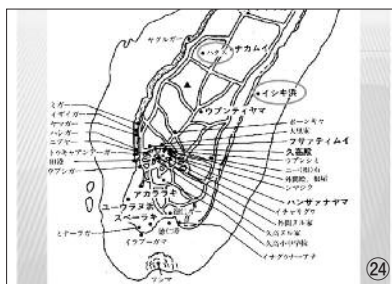
敷浜)で行われます(図②①)。沖縄では、竜宮城のある水平方向の理想郷を、ニライ・カナイと申します。ニライ・カナイの彼方から色々なものがやって



来る、すなわち漂着する。その最たるものが五穀です。今、沖縄の食生活を支えている穀類の最初の種は、久高島のイシキハマにもたらされ、そこから広がって沖縄の人は生きているのだ、というストーリーになっております。久高島というのは、沖縄本島の東にあり



ます(図②②)。イシキハマというのは、島の東側の海岸です(図②③)。この浜の西側の少し入ったところにハタスというところがあります。久高島に行く観光客も殆ど注目しなくなっていますが、イシキハマにたどり着いた五



穀の壺の種が最初に植えられた場所がハタスです(図②④)。現場に行けば周りの畑と区別がつかないけれども、ハタスという地名が残っています。今申し上げました1年間の行事の中に、2月中旬の癸(みずのと)のミンニーに、ウブスシガナシーという行事があります(図②⑤)。私は、調査中にちょ

祭日 (旧暦)	祭名	祭場	司祭者	祈願内容 と装束
2月中旬 ミンニー	ウブスシガナシー (お願立て)	各ムトゥ イシキ浜	ニライウブスシ	無事祈願 執事は、ク ニガミ(久 高・外間 ヌルと彼 神)と ミヤコ (豊満)は 白装、他は クワンジー
12月 ミンニー	ウブスシガナシー デガフー (お願結び)	各ムトゥ イシキ浜	ニライウブスシ	無事祈願の 結び

女性たちが、自分が出産した子供のうち男子一人につき三個の小石を海中から拾い集め、それらをニライ・カナイに向かって折り、それらを家に持ち帰り、翌年のウガンダチの前にはイシキハマに戻すことになっている。
この年中行事において、なぜ三ツ石かについては火の神との関係、海中からの石の採取については、ニライ・カナイと結びつく「ゆいむん」(寄り物)の考え方との関係が指摘されよう。



久高島の伊敷浜でニライ・カナイに向かっての祈り(ウブヌシガナシ)
(1997年3月14日)

②7

うどこの行事に出合いまして、参加させてもらいました。女性だけが基本的に参加するのですが、自分が産んだ子どもの中で男の子1人について、3つの硬くて白っぽい小石を拾う(図②⑥)。3人産めば九つの石を海中から拾って、ニライ・カナイへ向かってお祈り

をする(図②7)。具体的な光景は、写真のようになります。海のかなたに向かって、草履を脱いで、砂の上に座ります。後ろの黒い衣装を着た人たちが、今日お祈りをしてもらう人たちです。彼女たちは、目の前の海に下りて



ニライ・カナイに向かって海水中から拾ってきた石を持って
祈りをささげる女性(1997年3月14日/旧2月6日)

②8

行き、自分の産んだ男の子の人数分の小石を3つずつ拾います。オナリ神としての女の子は対象外で、男の子の分だけ1人につき3つずつ集めます。この写真(図②8)は、1997年に私が調査した日に、拾われた3つずつの石を一袋にまとめて、海のかなたに向かっ

てお祈りをしている光景です。それらの小石は写真(図②9)からもお分かりのように、海浜に散在するごく普通の小石です。大事なことは、石が海の中に漬かっていたという条件が満たされていることです。それから、できれば堅そうな石、できれば少し白っぽい石がいいと言われているようです。式が終わりますと、あっという間に、列席者が立ち去っていきます(図③0)。私はそういうことを知らないものですから、実は、写真の一番後にいる男性に



各女性が正人男子一人につき三個ずつの小石(ジューイシ)を
海中から拾ってくる(1997年3月14日)

②9



伊敷浜でのウブヌシガナシ祭の儀式を終えるや否や、足早に、
そして決して振り返らず立ち去る(1997年3月14日)

③0

向かって、「すみません、ちょっとお話を聞かせてください」と小走りで追っかけましたら、私が近づいた分だけ彼はもっと早く立ち去っていきながら、手を後ろに振って、「来るな」というような仕種をされました。それでも私は突っ走って行きたいぶ遠くへ行ってから、「すみません、お話を・・・」と云いましたら、「あんたは分かつとらんなあ。儀式の基本的なことをあんたは分かつとらん。私はあんたから逃げたんじゃなくて、儀式をした場所に神さまがおられる。私があんたの声で振り返れば、神さまを振り返って見る（確認する）ことになる。それをしたらいけないんだ。そのことをあんたは知らんのか」と怒られました。そのときに、文化の深みにおいて一つ勉強したという思いがしました。その後落ち着いて、お話を聞くことができました。

比嘉康雄（1938～2000）さんという大変有名な方がおられます。昔は警察官だったのですが、久高島に渡って、久高島の色々な民俗行事に関わっているうちにもうこの島に骨を埋めると決めまして、久高島の民俗行事を中心に貴重な写真を残されました。そのおかげで、久高島の神事の重要な写真は、この比嘉さんの写真で学ぶことが多いのです。これは1976年の写真で、同じウガンダティのときの写真です（図③①～③③）。本来、ゆっくりと皆さんにお話しができるといいのですが、今回は雰囲気だけ味わって頂きます。

「ゆいむん」の代表的なものはユイキ（寄り木）、すなわち、漂着した木、流木です（図③④）。これもまた非常に重要です。女性は従来民家の中で出産



旧曆2月中旬のお願立に拾った守り石を納めるヤジカたち
（写真：比嘉康雄、1976年）



イシキ浜での礼拝（お願結び）（写真：比嘉康雄、1976年）



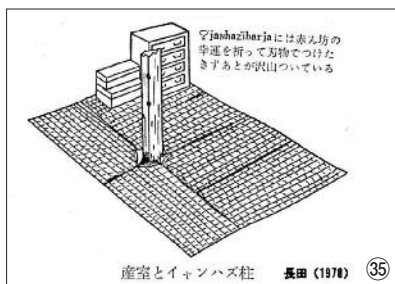
シティガフー（お願結び）で礼拝をする外間ヌル（左）と久高ヌル（右）
（写真：比嘉康雄、1976年）



奄美大島、喜徳（写真：遠久城蔵より提供）

をする例が多かったと思います。ユイキは産屋にも使われていました。奄美地域では、この産屋の中にユイキ、漂着の木を立てて、それを両手で握り、立ち膝をついた状態で赤ちゃんを産みました。よく私たちが、赤ちゃんを産み落とすと申しますが、現在はその言葉

が、出産時の姿勢からそぐわなくなっています。ところが、この当時は、立ち膝をついて、両手でこのユイキを握っていますから、まさに、赤ちゃんが産み落とされたわけです。こういうことを人間は長い間やってきました。この写真は流木ですが、明らかに人間が削った柱状の木なので自然木ではないのですが、流木の例です。長田須磨（1902～1998）が、1978年に『奄美女性誌』の中で書いている奄美大島大和村の事例ですが、産屋の中



産室とイャンハズ柱

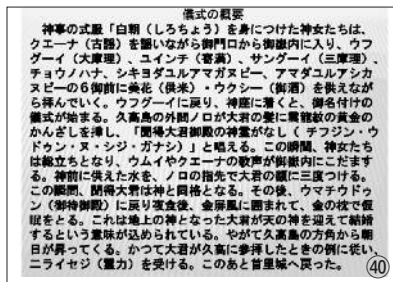
長田（1978）

に、イャンハズの柱と呼ばれているユイキ（流木）を真ん中に立てて、この柱にすがって出産をするわけです（図35）。「柱にいっぱい傷が付いている」と書いてありますが、これは、赤ちゃんを出産する前にわざと刃物で柱に傷つけるわけです。「イャンハズ

サシ」とか「イギヤサシ」というのは、言わなかったはずという意味で、出産前に海の神と、流木の中に宿る神、すなわち地上で成長していた時に宿った神の2柱の神が出産時に立ち会って、2柱の神がそれぞれ、この赤子はどうのこうのと将来に向かって予言し、暗示する。それが必ずしもいい事ばかりではない。そこで、「何々については言わなかった、聞かなかったはず」として親の願いを言いながら、柱を傷つけて出産をしたという。神への畏れの方で、厳しい現実ゆえに、良い運命を授かりたいという親の願いの表現でもあったのだと思います。

さて、次に以上のことを踏まえて、世界遺産の一つ斎場御嶽（せいふあうたき）についてお話したいと思います。斎場御嶽は、久高島の西側、沖縄本

島南部の東端にあります（図③⑥～④①）。琉球王が王に就任するときに、神女の最高位に位置する聞得大君（きこえのおおきみ）と呼ばれる女性が王に霊



力を与えることによって王となります。その間得大君が特別な霊力を持った神女となるために、久高島のノロ（神女）がやってきて、斎場御嶽で、その就任式が執り行われました。その後、間得大君が琉球王に向かって神的霊力

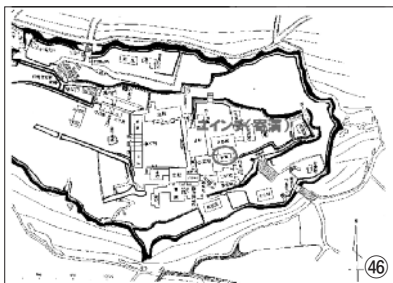


をおびた王権を与えることによって、琉球王になれるわけです。そういう儀式がありまして、その儀式が展開する場所が斎場御嶽です。ウフグーイ（大庫理）（図42）とサングーイ（三庫理）（図43）が儀式的核心的な場所です。

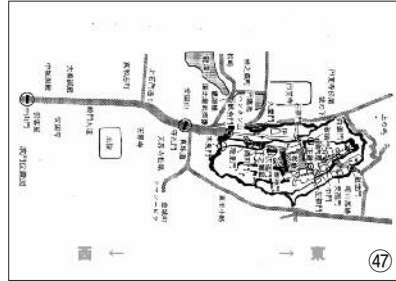


この儀式の期間、約1週間ぐらいは、この場所にとどまって、お祈りを続けるわけです。この滞在中に使われるユインチ（寄満）という場所があります（図44）。ここは台所であり、食に関わる空間です（図45）。ユインチとは、寄ってくるの「寄」という字に、満つる「満」という漢字の読みです。この

名称は、首里城の正殿の後部にある台所の名称にも使われていました。このユインチというのは、料理の材料、海のもの、山のもの、そういう食材が寄り満つることで、初めて食事というものが成り立つのだという意味に読み取れます。ここにも「寄る」という文字と意味が使われていることに注目したいと思います。「ゆいむん」の考え方の基本は海域における漂着という現象にあります。色々なものが寄り立っているのだという認識の仕方に注目したいのです。ここが一つ大事なポイントだと思います。首里城の平面図にユインチの場所が確認できます（図46）。琉球王のすぐ後ろ側、すなわち東側に台所がございます。この図の中に西・東の方向を



明示してあるのは、琉球王が、東方を背にして、那覇の町がある西方を向いて玉座に座るのです(図④7)。従って、琉球王の背中側は東になります。東は、太陽が昇る方向であり、首里城から見て東の端にある島が久高島です。その久高島で神事を司る女性、ノロの



力を得て、斎場御嶽で聞得大君に神女としての霊力を与えられる。そして、聞得大君はノロ中のノロとなり、琉球王にその霊力を与えることによって、王権が成立します。こうして、琉球王の首里城における日々の生活は、西方の那覇の町に向かって政務を行い、東方の太陽を背にして政治を行うという関係になっています。

以上、これまで色々な場面をお話してきましたが、三ツ石が火の空間であり、人間が火と水に対して、畏敬の念を抱いていることを見てきたと思います(図④8)。カマドは、三ツ石から成る火の世界ですが、三ツ石の石は水の世界にあったものを拾ってきてカマド

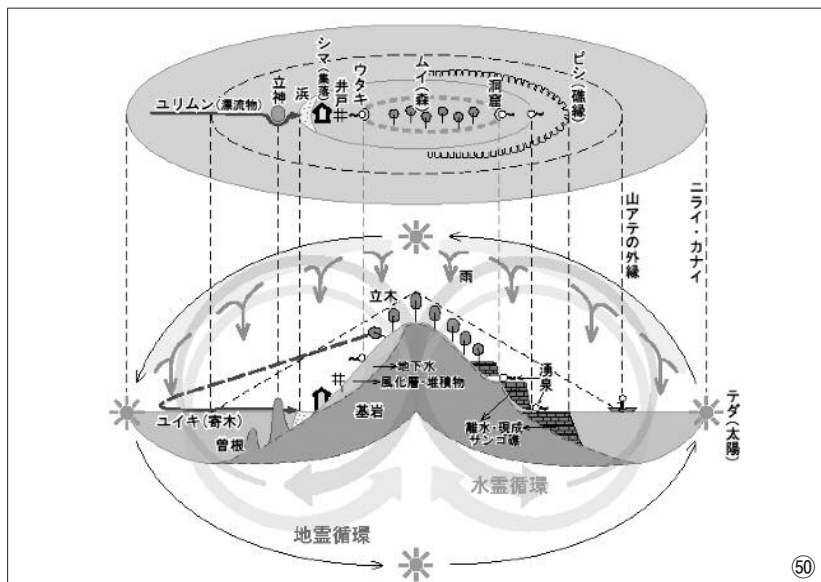
この他、三ツ石と水界との関わりを考える。雨から地表や地下を流下し、海へという水の流れは、陸域とニライ・カナイをめぐる水循環であり、それが絶たれることは、「おそれ」(恐れ・慮、そして畏れ)であった。一度掘った井戸は埋め戻せない。

の三つ石にしたという認識の重要性を指摘しておきたいと思います。

このように、ニライ・カナイの霊力というものを追跡してみると、大地から水平な海のかなたまでの全空間に、地上の火と太陽の日・陽と・天の水、すなわち雨の水から、川の水や井戸の水、海の水など地の水が混然と一体化

以上のような諸事例を示し、それら相互の関連を考察した上で、演者は大地の霊力とニライ・カナイの霊力との循環を考えた「地霊循環」と、この両空間を流れ動く「水霊循環」という考え方を提唱したい。

した連続体として認識され、そこに命、すなわち生命的な認識を持って生活空間と自然空間を連続的に理解していたと思われます(図④9)。沖縄や奄美の人たちが抱くこのような世界観というものを、大胆にも図にしてみました(図⑤0)。



上図が平面図で、下図がその断面図です。両図とも、右側は、サンゴ礁が隆起した階段状の海岸段丘地形が発達し、左側は隆起サンゴ礁の礁石灰岩で覆われていない地形という、沖縄・奄美の島々に特徴的な二つの相対する地形を描いています。また水の循環に注目してみると、空から降ってくる雨（天）の水が、河川水となり、一部は地表面から染みこんで地下水となります。それを人間は井戸を掘って生活水として使います。河川水も地下水も、最終的には海へ戻っていくという、一つの水循環があります。

そして、その水循環に関わった水界の石を使って、三ツ石という火処が造られ、そこで料理が展開されます。また自然の石に生命を感じて、生長する石という認識を持っていることが方言名称などからも窺えます。その認識は、石だけでなく、自然の地面、すなわち土や植物など色々なものが生命体として理解されています。人間も含む自然全体の生命体が、一つの循環の中にある。その循環に、私は新しく名称を与えてみようと思いました。その一つが、生命の水に対する畏敬の念が込められた水の霊、水霊です。これが一つの循環系の中にあるから、水霊循環というものを考えてみました。それから、ユイキなどの流木をはじめ、三ツ石などの石や土に込められた大地の霊

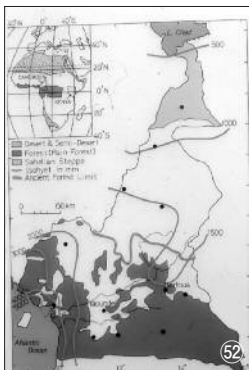
力、地面の力のようなものとして地霊循環を考えてみました。このような図にまとめてみますと、沖縄・奄美の人たちの一つの世界観あるいは宇宙観のようなものが視覚的に見えてくるように思います。

この図のような自然認識、世界観は、実は沖縄・奄美だけにとどまらず、もっと広く、日本の各地につながっているものの見方だと、私はかなりの確信をもって心の中で思っています。先ほど事例として取り上げました関上(ゆりあげ)とか、由比とか、由比ヶ浜とかの地名が各地にあります。こうした地名に込められた「寄る」という考え方が注目されます。外からやってくるものを、お客の「客」という一字か、それに「人」という字を加えて「客人(まろうど)」と言いますが、民俗学の折口信夫(1887～1953)は、そうした外からの霊的な来訪神を「マレビト」と呼び注目しました。このような彼方からやってくる、外からやってくるものには、善的なものもあれば

悪的なものもあります。いいことばかりではないのですが、こうした外からやってくる、寄ってくる関係の世界と、そういう考え方を日本人は大切にしてきたのではないかと思います。

次に表題にも掲げましたアフリカについて、短いですが説明させていただきます。私はサング礁研究とともに、長くアフリカをフィールドに、環境地理学的な研究をしています(図⑤①)。去年の夏もカメルーンの神体山の一つで、火山のカメルーン山周辺を調査してきました。この山を調査した背景には、富士山との比較を意識しております。カメルーン山と

いうのは、フェルナンド・ポールというギニア湾に浮かぶ島がありまして、アフリカ大陸中央西部の海岸線が東西方向から南北方向へ方向を転ずる、ちょうど曲がり角の





ところにある国がカメルーンです。図の南部が熱帯雨林です（図52）。この雨林地帯にカメルーン山があります（図53）。この山は高く、標高は4,000メートルを超えています。富士山よりも高いのです。この山は、最近でも何回か噴火していきまして、1999年にも溶岩が流れました（図54）。その噴火時の写真がこれらです（図55）。すごい迫力があります。溶岩流を上空から見た写真（図56）のこの道路は、2000年か2001年のときに私は通れなくて、諦めて引き返しました。去年行ったときは、迂回路ができていました（図57）。

ところで、富士山と同じように、バクウェリ（Bakweri）をはじめとするこの地域の人びとは、この山を、敬愛を込めてファコ（Fako）と呼び、神さまの山と思っています。噴火で溶岩が流下したことについて、彼らは私に次のような説明をしてくれました。「この山の神さまは男神で、溶岩はその神さま本体そのもので、それが流れ降りてきたのだ」と。カメルーン山の南西端は、広大なギニア湾に突っ込んでいます。少なくともカメルーンのギニア湾岸沿いの地域と住んでいる人たちの総称をサワ（Sawa）といいます。サワの人たちは、この海には人魚（mengu）になった女神が住んでいると

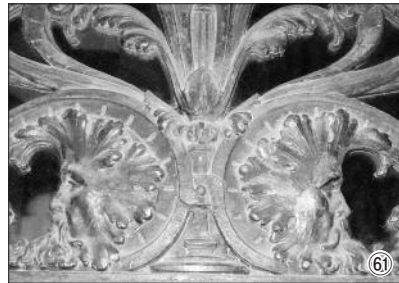
言います。地元の人たちは、「溶岩となった男の神が、海の女神に会いに行くために、海の方に向かって流れ下ってきたのだ」と、とてもロマンチックな説明をするのです。すごい説明だなと思いながら、私はこの後、女神についての儀式をやっている村に行き、船の舳先に彫り込まれた女神の船も見してきました。もう少し調査をする必要がありますが、この土地の人たちにとっては、海の女神とカメルーン山の陸の男神が、男女一組になっており、溶岩に神の本体の移動する姿と見て、神としての霊力の循環につながる考え方を持っているといえそうです。

次に話題が変わりますが、この写真(図58)は誰もが知っているパリのシテ島にあるノートルダム寺院のすぐ近くのお土産屋さんのあるビルの入り口です。扉の両側の柱の上部にはこんな顔の像



が2つあります。例えば、他にもこのようなものもあります。

パリの街を歩いていても誰も注目しないのですが、よく見ると髪の毛が生え際から徐々に木の葉に変わっていることにお気づきでしょうか(図59)。それからもう一つの注目点は、口からブナ、学名の属名でいえば、ケルカス (*Quercus spp.*)、ナラ属の仲間、ドングリの実をつける木の葉が多く出てきます。ルーブル美術館のドアのところにも、何気なくこの写真(図60)のような模様が見つかりますが、ご



く普通にいくらでもありそうなデザインです。しかし、この模様の下の部分に注目すると、男性の横顔があり、髪の毛が全部葉っぱになっています (図⑥1)。この葉っぱが、ずっと上



St. Mary and St. David's Church は、ヘアーフォード 家の職人による彫刻で装飾された入口があることで有名である。この入り口の脇柱(抱き柱)の右上部には、彫りこまれたグリーンマンがある。(Kilpeck, Hereford and Worcester)

64

方に伸びていくように模様ができていることに気がつきます。

それから、この写真はロンドンですが、看板に TO LET (賃貸) と書かれたビルの入口の上に、模様があります (図⑥2)。それを真正面から見るとこのようになっております (図⑥3)。



65



Kilpeckにあるロマネスク様式の教会の南の入口の東側の柱にあるグリーンマン(『悪魔の事典』p.427)

66



Somerset地方のCrowcombeにある教会には、宗教改革以前の1534年作の銘が入った美しい信徒席の長椅子がある。この椅子の面縁の板に彫刻されたグリーンマンは、口から豊穡を象徴する葡萄を生み出し、耳からは角が出ている。

67

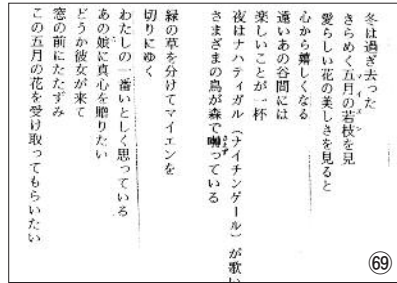


Devon地方Sampford CourtenayにあるSt. Andrew聖徒教会の屋根にグリーンマンがある。詳細は不明なことが多いが、5月祭に集まる村の若者の会(Jack in Green)と関係されている。今でも村の居酒屋の看板に描かれている。もともと教会には、異教の神をジャック、あるいはおちやのなを妖精であるRobin Goodfellow(別にPuck)と呼んだものが多かった。これらはキリスト教に改められる前(ニケルトの間で内のある豊穡の神として敬われていたものだ。

68

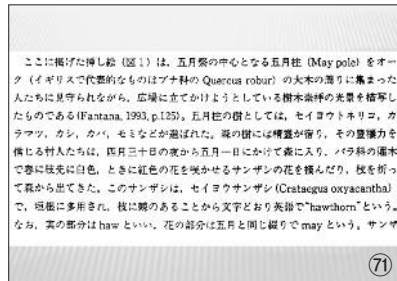
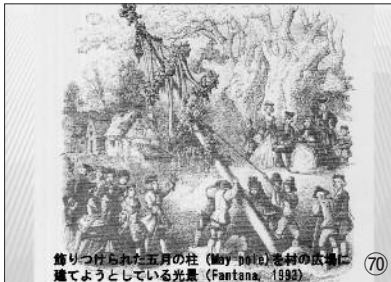
この写真(図⑥4～⑥6)はイギリスの教会の入り口ですがけれども、ケルトの人たちのものが残っております。このように、口から樹木の枝葉を吐き出すという、とても生命的な模様がたくさんあります(図⑥7～⑥8)。

ヨーロッパでは5月になると野山に草花が咲き乱れ、5月を賛美する詩が、とくにロマン派の詩人たちの詩に見られます(図⑥9)。日本をはじめ現代では、5月1日のメーデーは、労働者の日になっていますけれども、本来メーデーというのは、森の精が宿つ



たとされる樹木が5月1日に森から切り出され、それをメイポール、すなわち「5月の柱」と呼び、その木を村人たちが担いで、村の周りの畑を回り、さらに集落まで運んできて、村の広場にその木を立てて、若い男女を中心に「5月の柱」の周りで踊りをしました(図⑦0～⑦1)。こうして樹の中に宿っている霊力を畑とか民家、村人たちに直接的にも、間接的にも空間的にタッチして、新たな霊力を宿しました。こうして冬から夏へという季節の移り変わる節目に、新たな農業暦が始まりました。5月はいわば、霊力としての自然と人間との交流の季節であり、月でもありました。このような5月の柱の行事は、北欧に行くと時期がずれて、7月の夏至祭で同じようなことが行われます。興味深いことに、この立てる柱のことを「5月の柱」というようです(図⑦2～⑦5)。

これまでお見せしてきた頭髮が木の葉に変わる男性の総称としてグリーンマンといいます(図⑦6)。緑とか、グリーンは、時には緑の党とか、緑の衣





反応を示し、その一方で何故に緑に拘わり、緑であることを主張するのか、ということに、

私は興味があるのです。

本日の発表のまとめとして、まず私は、海に向かって祈りを捧げる世界を

装(図77~78)など、緑は植物の総称として使われたりします。日本人は緑が大好きといいますが、緑にとっても拘るように思えます。緑あつての環境といわれますが、一方でアンチ緑という考え方もあります。緑に対する嫌悪感というものを示す物語や話もあります。これを認識の差異といってしまったのでは、あまり面白くありません。何故緑ということに拒否感・拒否

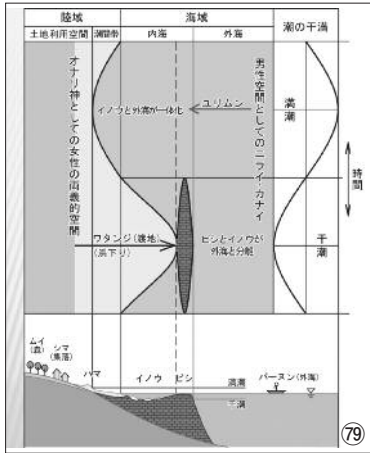
緑の衣装の着用 (Wearing of green)

異教の春の風習で、ヨーロッパにおいてはキリスト教の時代になっても、とくに5月に盛んに行われた。人間が緑の衣装を身につけると、模倣呪術の力により、母なる大地もその衣装にうながされて豊作の緑に包まれると考えられていた。

77

中世のバラッド(注:イギリスで中世以来口頭伝承されてきた物語的・叙事的内容の歌謡)で妖精と云われていた女性たちは、常に緑の衣装を身にまとっていたのであり、トーマス・ライマーThomas Rhymer(注:14世紀のスコットランドの詩人・魔法使い)など彼女らの恋人たちも、妖精の国にいたときは、緑の衣を着ていた。キリスト教徒はこれらの異教的伝承に反対し、緑色を死者や魔女に関連づけるとともに、「緑色は縁起が悪いというあの周知の迷信」を広めたのだった。緑色は、また古代の祭式の際の性的乱交とも関連づけられていた。(『神話・伝承事典』p.283より)

78



述べました。つまり、水平な海のかたの神、すなわち自然の力、霊力の到来を考える。そういうときに、この図（図⑦⑨）の下断面図に示されているように、海には毎日満ち潮と引き潮があります。この干満の変化を、サンゴ礁の上空から見ると、サンゴ礁の微地形の高低差の関係で、満ち潮の時と引き潮の時に、干上がる場所と水没する場所ができます。この変化は、1日の内に起きる小さな満ち潮・引き潮という海水準変化で

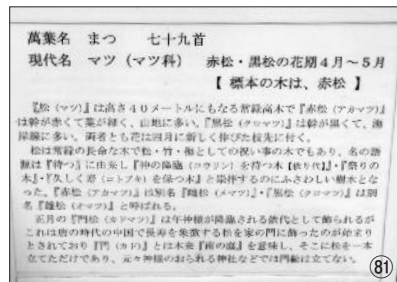
す。これをだんだんと長い時間での変化、例えば何年かに一度、100年に一度、さらには万年に一度ぐらいの時間スケールで見えていくと、氷河期と間氷期のような海水準変動の問題になります。

自然地理学に関わる私の立場からいえば、海は幸をもたらすという趣旨の話をしている限り、とても平和な世界なのですが、時として海は牙をむいて襲ってきます。例えば津波です。津波を我々はいつたいどう受け止めればいいのか。「ゆいむん」などと、のんきにありがたいことだと言っておれるのか、というお気持ちもあるかと思います。

これは、皆さんがよくご存知の「奇跡の一本松」と呼ばれている松の木です（図⑧⑩）。そしてこれはたまたま1週間前に奈良市の万葉植物園で撮影した写真（図⑧⑪）です。松という名称は、「マツ」まさに「待つ」からきてまして、この説明文のように一般には、神の降臨を「待つ」、「松」と考えら



奈良高田の「奇跡の一本松」 2011年9月23日 奈良大学設立 神奈川大学撮影



れます。つまり神の霊力の垂直方向の動き、または移動を考えているのです。しかし、私は、自然の霊力、すなわち神の来訪の日本における空間関係の原初形態は、水平方向であつただろうと考えております。「ゆいむん」、すなわち、寄ってくるもの、「寄物」を「待つ」という「マツ」であり、霊力の依り代だと考えるのです。「奇跡の一本松」のように海岸に生える松の樹は、まさに「待つ」という世界観を象徴していた海浜の松が残ったようにも考ええます。こういうものの考え方を、日本人は、マツに託してきただろう



と思います。

そして水平な海の彼方に向かって祈りをする光景を示す写真（図82）と、ニライ・カナイへの遥拝をする祠がこの写真（図83）です。また、沖縄にはしばしば、「ゆいむん」の岩である津波石が、このようにご神体となって、祈りの対象になっている例もあります（図84）。こういう津波によってもたらされた石を、ニライ・カナイの神そのものの存在として、言い換えれば海の霊力、ニライ・カナイの霊力の及んだ最先端として祈りをしていると考えられます。先ほどのカメルーン山の火山



の例でいえば、溶岩流の先端が、山の神の最先端と考える考え方です。こういう自然認識が、大切なのではないかと思いますのです。

最後の締めくくりは、ニライ・カナイからの「ゆいむん」、少なくとも沖縄の人々は、海のかなた「ニライ・カ

ナイ」という常世（とこよ）、桃源郷、ユートピアに相当する世界をイメージし、そこから由来する諸現象や諸物に内包されている霊力や聖性を生活の

中で実感してきたと言えます（図⑧⑤）。

さらにその実感を、季節の推移の節目、節目に祭祀を行い、それを通じてニライ・カナイの霊力が持つ浄化能力、再生能力に畏敬の念を込めて、心を寄せてきたと考えられます。さらにいい換えれば、祭祀の核心部分とは、海の彼方、ニライ・カナイからやってくる自然の霊力が寄ってくる海岸という海陸の狭間の最先端で、神女としてのノロがニライ・カナイの霊力を胎内に宿すことにあると考えられます（図⑧⑥）。祭祀は、ノロを中心とするカミンチュ（神人）集団によって司られて

います。このように祭祀の核心部分に存在するのは、必ず女性です。こうした女性たちがニライ・カナイからの自然の霊力を祭祀を通して受け止め、祭祀を介してその霊力が村社会にもたらされ、村社会は活性化し、再生し続けることとなります。年間の節目、節目に随時展開される年中行事の繰り返しは、自然の霊力の更新、再生を社会的に顕在化し、保証することで、人間が生み出した生きる知恵であろうと思います。

この世界観の概念図（図⑧⑦）に示したような地霊と水霊という両霊力の循環を考えたとき、改めて大地の生命的なもの、例えば土や石、さらにサンゴ礁も含め、人間の生活舞台の全てのもの。そして、最後、私の言いたいこと

ニライ・カナイからの「ゆいむん」

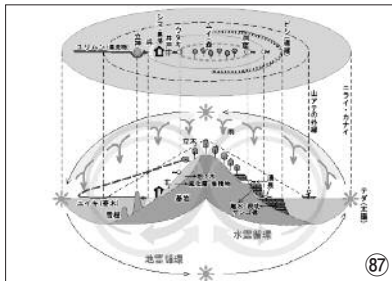
少なくとも沖縄・奄美の人々は、海の彼方にニライ・カナイという常世（桃源郷・ユートピア）をイメージし、それに由来する諸現象や諸物が内包する霊力や聖性を生活の中で実感し、さらに自然の節目の祭祀を通じてニライ・カナイの浄化、再生能力に心を寄せてきた。

⑧⑤

さらにいえば、ニライ・カナイからの自然の霊力を最前線で受け止め、それを胎内に宿すための祭祀は、ノロを中心とするカミンチュ集団によって司られ、その核心部分に存在するのは、必ず女性である。

こうした女性たちによって、ニライ・カナイからの自然の霊力は、祭祀を中心に村社会にもたらされ、社会を活性化し、再生させ続ける。年間の節目に随時展開する年中行事の繰り返しは、自然の霊力の更新、再生を社会的に顕在化し、保証する、人間の生み出した生きる知恵であろう。

⑧⑥



⑧⑦

このような両霊力の循環を考えたとき、改めて大地の生命的なものは、土や石、サンゴ礁も含め、すべてのもの、そして われわれ人間自身が、ニライ・カナイからの「ゆいむん」であることに思い至る。

⑧⑧

ですが、私自身、人間自身も、結局は「ゆいむん」だったのだという認識に思いが至ります（図88）。マツ（松）も然（しか）り、今私たちと一緒にあるものも、実はそういう存在のものなのだ。たまたま、この土地に生き、存在しているけれども、実はそうなのだ。そういうふう思うことによって、自然に対する深い畏敬の念というものが湧いてまいります。このような考え方を背景に成り立っている世界もあるということを述べてみたかったのです。時間がきておりますのでこれで終わります。

【山崎友子教授】 どうもありがとうございました。本当に時間が少ないところをありがとうございました。最初に先生のご紹介で忘れておりましたが、堀先生は自然地理学がご専門でいらっしゃいます。自然地理学と人文地理学があります、理科と文科と、そのように分けがちですけれども、どちらでもものごとの本質というところが、このように突き詰められていくのだということを勉強させていただきました。お一人だけ、少し時間がありません。できるだけ簡潔なご質問だとありがたいのですが、ご質問はありますでしょうか。はい、どうぞ。

【会場1】 あまり関係ないかもしれないのですが、メイポールのお話で、山から農地などに山の神さまを連れてくるというイメージかなと思ったのですが、日本だと、サクラの木に山の神さまがいて、ウマで連れてくるというようなお話を聞いたことがありまして、もしかして、同じようなものなのかなと思ったのですが。

【堀信行教授】 柱という点でそっくりなものをいえば、諏訪湖岸の諏訪神社の御柱祭でしょう。それから、山から木を切り出す伊勢神宮の式年遷宮とか。ああいうときに切り出してくる、あの木に対する対応の仕方がそっくりです。いまおっしゃったようにサクラも、いま我々はおっぱら「花見」といいますが、「紅葉狩り」と同じように、「桜狩り」という言葉もありました。あの「狩る」というのは、実際に山に分け入り、枝を折って、かざして里へ持ってくるわけです。この「かざす」という言葉は、実際、『万葉集』にも

いくつか出てきます。狩った枝を「かざす」のは、自然の霊力が宿る依代としての枝への畏敬の念と、それを汚すまいとする心意の表現だと思います。狩った枝それ自体を神と認識しているわけです。したがって、ご質問のように桜の枝と「5月の柱」、メイポールは、同じような意味合いを持っていると思います。なお、頭髮に挿す「簪」（かんざし）がありますが、実はこの言葉は「かざす」に由来します。例えば、生花を造花にして、そのかざしをここに付けて、常時使えるようにしたのがかんざしなので、日本人の心性のなかにそういう神を手元を持つてくるということは本来は不遜なことですけれどもそれをミニチュアにして持つてくるといことです。ですから、サクラの樹も、本来やってはいけなかったはずのことを、貴族が寝殿造りのなかに山桜を植えるようになって、それ以来、間近に見る桜花が散るのを見て、命がどうのこうのということと結び付いて、散る花に興味がいくようになったようです。それ以前は、山のなかでサクラは散っていたわけです。それを見て、季節のシンボルと思ってきたわけです。そういう点で、いまおっしゃったように、日本の中でのかざすことというのは、同じ心性だと、私は理解しています。

【会場1】 ありがとうございます。

【山崎友子教授】 ありがとうございました。それでは、以上をもちまして、堀信行先生の講演を終了いたします。もう一度拍手をお願いいたします。

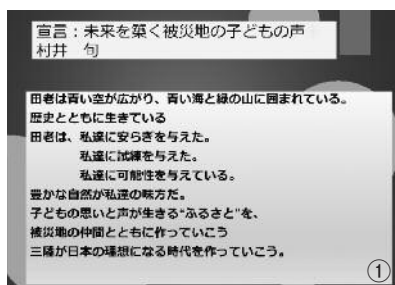
引き続きまして、第3部のパネル・ディスカッションにいきます。

第3部 討 論 会

パネル・ディスカッション

災害と自然認識～復興を支える自然観の再構築を求めて

【山崎友子教授】 それでは、パネル・ディスカッションを始めます。前回のフォーラムのときに、最後に「被災地の子ども宣言」ということで、中学校2年生で、大棒さんがおられる田老で被災した村井旬君が、こういう宣言



文を考えて書いてくれました（図①～②）。ブレインストーミングの際に、彼が一番最初に言ったことは、「まず頭に思い浮かぶのは、あのトンネルを抜けて田老に向かうとき、国道を曲がってカーブのところから見える青い空と山と海なんだ」でした。自然というものがいかに人間の心の中深くにあるのかということ、その自然というところを次のテーマにしたいと思いました。それから、一番最後のところで、村井君はいま高校生ですが、「三陸が日本の理想になる時代をつくっていこう」というように言っています。今日



の被災地の立場での発表の中でも、非常に本当に大きな犠牲であったわけですが、自然に対する恨みというようなことではなく、新しいものを作っていくというご発表があったと思います。高校生も直感的に、そういう時なのだ、そういうことをしなければいけないのだと感じているように思いました。

本当に15分ほどしかありません。一番最初に、皆さんから頂きましたご質問で、少し簡単に答えられるところから答えて頂きまして、その後、防潮堤というものに対してのご意見があったので、防潮堤をトピックにご意見をいただきます。それから、最後に堀先生、遠くから来て頂きました。また違った視点から、第1部の発表について先生のコメントを頂き、最後に、登壇者の方々、本当に1分ぐらいしかないと思うのですが、今回、災害文



化ということをテーマにしました。それを意識していく、みんなが意識して持続していくには、文化というのは、空気のようなものですが、どのようにすればいいのかというキーワードをお話し頂ければありがたいと思っています。それでは、短く答えられる

ものから。

「山崎先生、東海・東南海の被害想定など、この神社の立地・目的等での視点で、調査・研究はなされているのでしょうか」という質問がありました。お願いします。

【山崎憲治元教授】 調査・研究というのは、必ずしも、私が全部で調べているわけではなくて、そういう研究をしているということは十分には聞いておりません。ただ、実際には、それぞれ東南海地域あるいは沿岸部の地域で、比較的高いところにある神社に対する避難というのは、可能性はあるだろうと思うのです。今回三陸が被災に遭ったあと、どういうところがやられているのかということが見えてきたわけですから、予めここはどうかということの調査をやっているというのは、私は必ずしも十分には知らないというのはあります。ただ、非常に身近な例として、そういうところは避難場所になり得るということもあるのではないかなということが、今日の問題として出ています。その一方で、低いところは全部やられているということも前提にあります。

【山崎友子教授】 よろしかったですか。

それでは、「畠山さん。地域の人たちになんと呼びかけてどのように説得して合意してもらったのでしょうか。」お願いします。

【畠山信副理事長】

地域の合意の仕方は、各地区ごとに全然違ったりするのですけれども、う

ちの集落の場合は非常に古い集落なので、なんとなく三角形の形をしているというのですか。長老がいて役員がいて、その他がいる。その他というのが、一番数は多いのですけれども、最大とまず見ていいです。長老に話が通じれば、大体オーケーなのです。長老を落として、役員を徴集させて、「これでいいですか」「いいですよ」全員が集まったのがたった2回です。そこで、「要らないよね」「要らないです」「はい」という要望を元に、合意形成の取り方です。悪いやり方かもしれないのですけれども、それがどちらに転ぶかというのは、非常に大きな問題だったので、長老という位置にいる家柄の人がいたというのは非常に大きいです。

【山崎友子教授】 ありがとうございました。それでは大棒さま、「近代的な設備を持って正確な情報を伝えるのは大事だと思いますが、東日本大震災のようなあまりにも大規模な災害の際、それがきちんと機能する保証はあるのでしょうか。また、人が情報を伝え続けるときも、その人の生存を考えると、最後まですることは難しいのではないのでしょうか」というご意見・ご質問ですがどうでしょうか。

【大棒秀一理事長】

やはり、長年の津波との戦いで養ってきたからといいますか、田老の公的な役所は全て高台にありました。明治、昭和、その前の津波等を経験した上で高台に公の施設が必要だということで、小学校、中学校、高校、役場が作られていましたので、今回のような大きな津波が来ても、今回は大丈夫でした。その中で、近代的な設備いわゆるテレビのようなものに襲ってくる津波をライブで見ながら、それを住民に情報提供するということは非常に大事なことを思っています。そういうことは、田老は出来ていました。出来ていたのですが、行われなかったということが問題なのかなと考えます。

【山崎友子教授】 検証しなければならないという、そういうことをおっしゃってありました。ありがとうございました。それでは、防潮堤の問題についてですけれども、「田老では、もし仮に強固な防波堤があることで住民の

津波に対する警戒心が薄れてしまうのなら、津波の具体的な解決策はなくなってしまうのではないか。人々の恐怖心は、いつか薄れていくと思う」というご意見がありました。それに対して、畠山さまの発表では、プレゼンのなかで防潮堤の構築への疑問を話されていました。私も同じ意見で、森里海へと連続した自然環境を保全することは非常に重要だと思います。その一方で、津波被害から、人やまちを守るということは、避けては通れない問題でもあります。そういう観点で、自然と人とか持続可能に共生していく社会を構築するためには、どのようなことが重要になってくるか、考えをお聞かせいただきたいと思います。本日の発表者お3人から、発表以外で、またさらにこのような防潮堤と安全・自然環境という問題に関して、補足をなされたいのではないかなと思うのですが、畠山さまの方から何かありましたらどうぞ。

【畠山信副理事長】 防潮堤を全部なしにしろと言っているわけではなくて、要らないところが多々あると。原発とかは、防潮堤ではなくてもシェルターにしていればいいのです。そこに予算を全部突っ込んで、防潮堤なしでいいところはそれでいいのではないかな。無駄な税金を使わないで、税金ですから。ただ一方で、防災・減災というのは、確かに重要な課題でもあります。ただ、私はもう要らないなと思うところは、皆さんは高台移転をもうしてしまっているのです。決まっているのです。津波が押し寄せたところには、防潮堤をつくるから家を建てていいよとかそういう駆け引きはあります。ありますけれども、津波がいったところは基本的に家は建てられないので、みんなどこかへ行ってしまうわけです。人口減少、費用対効果、減益費を考えると、10年20年すると、人がいない浜に大きいコンクリートの塊だけが残るふるさとかたくさんできるということがおかしいのではないかなと。それを、人、自治体、つまり、市町村が管理費をずっと払い続けられるのかというところもすごく疑問です。まずは逃げるというのは国も言っていますし、住民も皆分かっているので、避難路の整備といわれるのですけれども、避難路も管理しなければいけないですから。やはり、いわゆるスマートシティといわれていますけれども、そちらに振ったほうがいいのか。あとは、覚悟して住む。気仙沼などは、元々防潮堤はほとんどなくて、チリ地震

とかでやられても、自分たちの力で再起してきましたから、覚悟して津波で流されてもいいよという人は海辺に住めばいいのではないかな、単純にそれだけです。



【山崎友子教授】 ありがとうございました。田老のほうはどうでしょうか。逆に壊れたものを残す、そのぐらいのことをして忘れないように覚悟できるようにという思いだと思うのですが、補足等がありましたらお願いします。

【大棒秀一理事長】 田老の防波堤・堤防は悲しんでいます。田老に堤防があったからということでチリ地震津波のときは全然被害がなく、三陸沿岸は今そういうコンクリートの壁が連なってできるようになりました。今回、堤防が波で壊れました。堤防があったから、みんな信じて逃げなかったんだ。そのようなことが言われています。どうすればいいんだということになるかと思います。そういう記憶というものをしっかり残しながらまちを再建しなければなりません。それと、やはり逃げることは必要。まちづくりのなかでも、田老は昭和8年の津波を受けた後、あれだけの堤防をつくりながら山に向かって真っ直ぐな道路を避難路をしっかりと作っていました。現状になったということで、今後は、しっかりと検証してその検証結果を踏まえた実践訓練と疎かになってきている点のフォローをしっかりとやりながら伝えていくことではないかと考えます。

【山崎友子教授】 ありがとうございました。それでは、両方の被災地の被災者の方の話を聞いて、何か補足等がありましたらお願いします。

【山崎憲治元教授】 田老一中の琴畑さんもここにおられますが、現場を最もよくご存知だと思いますが、「壊れちゃったんだ、あの堤防は」という外部のマスコミの意見があるのですけれども、あの堤防によって第一波を防い

だおかげで何分間か、そう5・6分の時間をくれたわけです。その5・6分の時間というのが、実は、子どもたちを助けた、幼稚園児を助けた、あるいは逃げる時間を与えたという、そういう意味では大変に重要だったと思います。あとで見たら、津波が防潮堤を超えてしまったから効果がない、必要ないというようになりがちです。けれども、そのところに時間的な余裕を生むという、大変に大きな仕事をしてくれたと評価したいと思います。ですから、それぞれの地域に応じて、防潮堤という問題は必要な場合もあるだろうし、あるいはいやそれではなくて自然をきちんと残すほうが将来に意味があるのだと住民が意思表示するケースも考えられるわけです。地域によって多様な可能性があることをきちんと認めていかないと意味がないのかな、という感じはします。防潮堤は高ければ高いほどいい、というそういうものではないし、それによって、大もうけができると考え主張するのなら、そんな話は将来につけを回すだけの問題となってしまう、今日論議した課題とは全く意味が違うと思います。

【山崎友子教授】 今回のフォーラムは、タイトルが「多様な自然観」ということでした。多様という言葉、一つのキーワードになるかと思います。それでは、堀先生のほうから、今日の発表をお聞きになりましてのコメント・ご感想といったものをお願いいたします。

【堀信行教授】 内容が多岐にわたっていますのでまとまったことが言えないのですが、まずは防潮堤のほうから述べます。私はサンゴ礁地形を研究していますが、サンゴ礁という地形は自然の防潮堤なわけです。それが私たち



の目には素晴らしく美しいのです。しかし、人間が造った防潮堤を美しく感ずるか感じないか、造った人は苦労もあつて感無量だろうと思います。立場を変えれば美しさもまた変わるだろうと思います。サンゴ礁を研究している立場からいえば、防潮堤もこれをすれ

ば完璧、ということは不可能だと思います。時間と共に劣化することもありますと、人工物が完璧とか永久ということはとても難しいことをまず卒直に認めることかと思っています。その上で、サンゴ礁の地形構造に学び、海が見えないようにすることは、いけないのではないかと思います。生活の目線から海を消してしまうような構造物は、その人たちから海への思いを断ち切ることになってしまうのではないかと思います。

広島大学にいたとき三角州の住民の地盤高や景観に関する認識調査をしたことがあります。太田川の河川敷や堤防の高さは、洪水や高潮対策で安全性を求めて、時代とともにどんどん高くなってきました。そうすると、橋もより高い位置に付け替えられ、三角州で元来平坦だった平野部にどんどん坂が増えていくわけです。立派な橋を渡るごとに長い坂道ができるわけです。そこには、元から住んでいる住民がいるわけです。そのような方々は、自宅からだんだん川が見えなくなっていました。聞き取りの時、住民の方々が、「昔は帆掛け船が行き交う風景が見えたのに、今じゃーそれも見えない。」とか、「すぐ横が川じゃったのに、川が遠くに行ってしまうた。」と言います。さらに「あなたの住んでいる地面は、海拔何メートル位ですか」と聞いて歩きましたら、恐ろしいことに、ある方は、平野部なのに「60メートル」と答えました。これは最高値で極端な例としても、10メートル、15メートル、20メートルと、ためらいもなく答える方が何人もいました。実際には、地盤高は1メートルから数メートル以下の海面に近い場所での結果です。川や海を見えなくさせると、時間とともに人間の認識がどんどんずれていく、という現象を広島で経験しました。やはり心から、あるいは、目線から対象物を消していくというのは、その論理の文脈の可否によって異なると思います。したがって、防潮堤を高くすればいいという論理だけでは、どうしても拒否反応を示したくなります。あまり力強い発言ではないのですが、このような感想をもちます。

次に、畠山さんのお話ですが、我々地理屋は、流域という単位を基本的な空間単位として考えています。もう長い間日本の人間やものの移動、村落の形成は、流域単位で展開してきました。森とか里とか海とかというのも、よく考えてみれば、水の循環する空間単位と深く関わっている、その事を大切

にしましょう、というお話にも受け取れます。さらに、そこにきちんと生えるべきものが生え、存在するものがあってこそ、自然の循環が成り立つのだ、というふうにもお聞きしました。したがって、自然の単位、水の配分のシステムを、人間がいじくことのいけなさがあります。それから、存在すべきものを存在させないようにする人間の行為、例えば、森林を伐採して、斜面に宅地をどんどん増やすとか、そういう人為のもたらす結果というものに対して、無配慮であつたり、何をどのように配慮すべきかについて、少し無知すぎるのではないのでしょうか。

それから、地下水のお話も出てきて、とても私はうれしかったのです。我々地理屋は、普段見えない世界、例えば水面下とか、地下の中でもものが存在し、動いている、つまり、空気や水が動いていること、あるいは生き物たちが存在しているのを、決して忘れてはいけないと思っています。しかし、そのことを、我々は平気で忘れてしまいます。この他、例えば、瀬戸内海では、平気でゴミをこっそりと捨てに行く人がいます。内容的には、事件ですが、事件にならない。余程の場合にしか新聞に載らない。でも、海底を引っかけば、テレビが転がっているわ、とんでもないものが捨てられて、瀬戸内海の海底には相当量のごみが沈んでいるのです。そのことを指摘し、調査をしようとしたら、ある事情からストップがかかりました。見えないものに蓋をすることを、人間はたくさんやっていると思います。それでいいのかという問いが込み上げてくるわけです。従って、全てそういう流域というのを、ただ、地表面だけの流域ではなくて、地下も入れた水循環を我々は決して忘れてはいけない。だから、都市でビルを建設して杭打ちをしたら、少なからず地下水の動きを止めてしまいます。そうしたら地下水は腐るから、工事で硫化水素や何かが出て、鼻をつまんで工事現場を立ち去る人がたくさん出ます。だから、工事中に地下に入って行ったら、バタンと人が倒れるようなことがあります。それは、地下水の水循環を断って水を腐らせるような土地利用をしたからです。したがって、我々は、まだまだ知識が足りない。そのことを反省しながら、自然を大切にしないといけないのではないかという教訓として、畠山さんの話を聞きました。

【山崎友子教授】 昨日宮古に行きました。大棒さんのご出身である田老の高校で高校生に会ってきました。田老の防潮堤は、天端が何メートルか幅があるのです。自転車に乗っても行けます。他の地域の防潮堤よりもうんと天端が広いわけですが、高校生はデートコースにしていたのだそうです。ですから、たぶん、防潮堤という言葉一つでは片付けられないものがあるのかなと思いました。

最後の質問といいますが、震災からまもなく3年が経とうとしています。しかし、僅か3年でもう津波・震災は忘れ去られそうになっています。そこで、重要になってくるのは教育だと思います。しかし、どういった教育を行っていけば、津波文化の継承につながるかわかりません。そこで、ご意見をお聞きしたいと思います。どうすれば、津波文化が継承できるのかお願いします。持続可能な社会の構築に向けたご意見をお聞かせいただきたいのですが、キーワードを1つか2つだけ、それぞれの先生方に言っていただいて、このパネル・ディスカッションを終了させて頂きたいと思います。恐れ入ります、難しいことを言って申し訳ないのですが、キーワードをお願いいたします。

【畠山信副理事長】 私は単純なので忘れるものはしようがないという考えです。ただ、水の重さとか水の流れはどのぐらいのものなのかというのを、自然体験のなかから知っててもらいたいな。そこかなと思います。

【山崎憲治元教授】 私は地域を知る事だろうと思います。それは、自分の体験を通じて、生産者が生産を通じて、地域を知り、それを次の世代にきちんと伝えていく。何が地域の課題なのかということを、常に明確に持つていくことが、安心・安全に繋がっていくのだと思います。

【大棒秀一理事長】 津波は災害ではなくて自然現象です。必ずやってきます。日頃から、それに備えて、色々なことをこれまで経験したことや訓練しながら忘れないことではないかというように考えます。

【堀信行教授】 一言で言えば、自然そのものを、あるいは自分の住んでいる場所をよく知るといことが一つだと思います。親しむこととともに、知りたいという気持ちが湧いてこない限り、土地を愛するとか、自然を愛する、という言葉は嘘っぽくなると思います。

【山崎友子教授】 ありがとうございます。このパネル・ディスカッション、フォーラム全体が、忘れない、大事なことを継承していくことにつながれば幸いだと思います。以上をもちまして、パネル・ディスカッションを終了させていただきますが、皆さん、このままでいていただいていいですか。閉会のご挨拶を副センター長のほうから申し上げます。

● 閉会挨拶 ●



【越谷信副センター長】

先生方どうも遠路はるばる、長時間にわたり非常に貴重なお話しをして頂きました。私自身も工学部においてどちらかというとトンカチ系地質屋ですので、非常に感銘を受けました。特に、堀先生のお話にあったような、我々が非常に長い人類の歴史

のようなものの中で、その地域で暮らしてきて、身に付けてきた何かDNAのようなものがきつとあるのだと思うのですが、ただそれを、今の私たちは多く忘れているかもしれない。それで、たぶん畠山さんもおっしゃったように、自然をそのまま受け入れるという過ごし方もある、大棒さんもそういうことをおっしゃられる、必ず災害はやってくる、そういう教育というのは、地域を知ることが大切だと、山崎先生もおっしゃる。そういうことを含めて、非常に考えるネタも、ものすごくたくさんもらいました。どうも有り難うございました。大変勉強になりました。今後も、こういう形で、災害文化というのは、おそらく、災害文化ができましたという何かものがあるのでは

なくて、人々が考えていくことや、活動していく事そのものが、きっと文化になる。理系の人間が変なことを言っていると思っていただければと思いますが、そのようなことかと思います。今日、参画された会場の皆さんも、深くそういったことを常に念頭で考え続けることが、おそらく最も強い防災力をつくる力の源になっていくのかと思います。本日は、どうも長い時間貴重なお話を大変ありがとうございました。

【山崎友子教授】 それでは、これもちまして、第7回防災フォーラムを終了させていただきます。暗くなりましたので、足元どうぞお気をつけになりましてお帰りください。ありがとうございました。お帰りの際、出口のところにアンケートの回収箱がありますので、どうぞよろしく願いいたします。以上をもって、終わらせていただきます。





岩手大学地域防災研究センター
第 7 回 地域防災フォーラム

**自然と共生する人間
多様な自然観と災害文化**

発 行：2015 年 2 月 20 日

編集・発行：岩手大学地域防災研究センター
〒020-8551
岩手県盛岡市上田 4-3-5
TEL 019-621-6448
<http://rcrdm.iwate-u.ac.jp>

印 刷：河北印刷株式会社

